1月3日

「良い羊飼いに導かれ」

ヨハネ 10:11

武安　宏樹　牧師

① 「わたしは」

「わたしはある」(出 3:14)と神がモーセに顕現されたのと同じ語が用いられ、主イエスが御自身を強調します。「盗人」「雇い人」「良い牧者」が横一列に並び、異口同音に「良い牧者」と名乗れば、真贋を見破るのは簡単ではありません。政治と同じく国民がチェック機能を保つには、有権者の主体性が必要です。耳障りの好い甘言ばかり頼るようでは、エレミヤではなく偽預言者を愛して、可視的要素で判断する感性や、「赤信号みんなで渡れば」的な多数決で滅んだ、ユダの民と同じ轍を踏みます。自分の霊的確信と豪語するほど怪しいものはありません。完全な神の前で不完全との認識が、神と正しい関係へ導きます。

② 「良い」

神の全体的視点で物事を判断する霊性の必要の次に、「良い」の意味ですが、単に道徳的な「アガソス」でなく、魅力的な意を含む「カロス」が用いられます。難病を治す著名な医者は「名医」ですが、患者の話によく耳を傾け優しい村の、「良い医者」には、またかかろうと思えるような付き合いやすさがあります。「我は善き牧者にして、我がものを知り、我がものは我を知る」(14 節文語)から羊飼いと羊との信頼関係を前提として、獰猛な狼に立ち向かえると知ります。単に囲いの外に出ると危険と言うだけでなく、なぜ駄目で出るとどうなるか、腑に落ちるよう親身に説明する。良い牧者は相手の身になって付き合います。

③ 「牧者」

エゼキエル書 34 章には、悪い牧者と良い牧者との対比が詳述されています。前者は羊を金のなる木としか考えず、牧場が荒れ放題になっても意に介さず、パワハラ経営で、結果的に生気無く怯え毛が伸び放題の醜い羊が育ちますが、それでも自分は悪くないと責任を逃れます。対する後者は「わたし」の頻出で、細かい箸の上げ下げを言わず、失敗しないだけの気の小さい経営者でもなく、失敗してもわたしが責任を取るから、いっぱい食べて広い野原で遊びなさい、草無くば次の良い地へ導こうと、自由と主体性の中で責任を取る牧者であり、敵に「すべての武具を身に着け」(ｴﾍﾟ 6:11)攻撃し、羊は霊の目を開かれます。

1 月 10 日

「時が満ちるまで」

ヨハネ 7:1～9

武安　宏樹　牧師

前章までは敵対勢力が態度を決めかねて論争していたのが、本章以降では イエスを殺すべしと結論ありきで、その時を見計らって着々と動き始めます。だからガリラヤにとどまる判断は、一言で言えば危険回避に他なりませんが、上京や祭参加が嫌なのでく、「わが時はいまだ到らず」(文語)の認識でした。 いた本日のキーワードは「時」です。ここから教えられることを見ていきましょう。

「すべてのことには定まった時期があり、天の下のすべての営みに時がある。」伝道者の書は「空」が主題でも、仏教の諸行無常と違って有神論の世界観です。神の与え給う財産＆名誉＆人間関係＆快楽も、人が良かれと求めている限り、得られても右から左に逃げていく空しい努力です。全てに時があるからです。だから神の恵みの御手を人が掴むために、目に見える形で現される交差点が、「タイミング」で、私たちの信仰生活はいかに神の時と人の志を合わせるかに、かかっていると言えます。神は御心について、そして将来起こるべきことを、聖書に啓示しています。捕囚も十字架も終末も神が用意しておられる「時」で、とはいえ「XX 年 YY 月 ZZ 日」とは啓示しません。それは世が堕落しているからで、聖書に記されない不確定＆不明確な事柄は、神に祈り求めるしかないのです。

ペテロは終わりの時について、「到来を早めなければなりません」(Ⅱﾍﾟﾃ 3:)と神の時を動かしうることを、聖書的根拠と信仰に基づいて語っています。神の時の全ては判らずとも、私たちの求め方で示されたり動かされるのです。「わが時いまだ満たねば」(文語)は完了時制で、以前からバケツに水を溜めて、かなりいい線まで行っているが、未だ満水になり溢れるまでに達していない。そのように点ではなく、過去～現在～未来の軸から線で捉えるよう勧めます。主イエスが選ばれたのは、人の時に流されずに神の時の流れに従ったからで、兄弟たちにも悪魔にも行ったのは、信仰による時の優先順位の明確化でした。双方とも「今」動くなら従うならと誘惑するも、主はそれを退けるだけでなく、結果的に復活＆高挙を成し遂げられて、比類なき栄誉を収められたのです。「神のなさることは、すべて時にかなって美しい」(伝 3:11)求めることでしか、神の時は分かりませんが、忍耐しつつ求めれば各人に絶好の時が開かれます。

1 月 17 日

「水面下での動き」

ヨハネ 7:10～13

武安　宏樹　牧師

ガリラヤにとどまっていないで上京せよと、無理解な兄弟たちに言われた主イエスは未だその時ではないと断るも、結局は後から「内密に」上京します。本日の箇所で他にも各人が、ひそかに捜し回り噂し続ける様子が分かります。主イエスが動くところに、神の時と人の時が反応して事態が動き始めます。

① まず退いて祈ること

5000 人給食で人々が熱狂して連行しようとしたのも、折しも過越祭前です。されど主イエスは世の望む王となり、熱狂に飲まれることを良しとしません。その前に時を見極めるために、山に退きひとり祈って備えられました(6:15)。私たちも朝に神のことばを味わい、人の必要に思いを巡らせ一日を始めます。過去の蓄積が現在の判断に役立ち、主がどう導かれるか点から線につながる。人に求められる時には祈り、求められない時も御霊のうめきで立つことです。

② 水面下で動き始める

主イエスは居心地の良い故郷にとどまらず、十字架の待つエルサレムへと、歩き始めます。兄弟に言われたからではありませんが、信仰的とはいえない人の言葉を通し事態が動くことがよくあります(11:50)。神のストーリーと人の目論見が絡み合って実現していく。その背後で悪魔も糸を引こうとして、最終的に願ったり叶ったりと見えた十字架で、死と復活にて主は勝利します。人に対しても悪魔に対しても全てを統御して、神が手を動かしておられます。絶えず祈りで御手を探り、水面下で動き始めると御手が動くのが分かります。

③ 本番での決戦

反目し合うパリサイ人とサドカイ人、ヘロデとピラト、群衆も巻き込み、イエスを十字架につければ全てが解決すると、悪魔の惑わしに全員与します。主イエスが苦難から解放されるため出された条件は、自分を救うことでした。けれどもそうされなかったのは、人の願いよりも神の御心を選んだからです。主イエスは自分を「救えなかった」のでなく「救わなかった」。人生の水面下で、父が子を救うことを知るからです。苦難の下に祝福が流れています(ﾖﾌﾞ 42:)。

1 月 24 日

「御国の民として①」

詩篇 23 篇

武安　宏樹　牧師

本篇の構造は「たとえ死の陰の谷を歩むとしても～」(４節)を谷間として、 サンドウィッチ状の並行法と読み取れます。その順で話を進めていきます。

①「所属」（１節前半＆６節後半）

「主は私の羊飼い」と冒頭で語るのは、自分が何者で誰に聴従する存在かが、最重要ということで、それによって地上的＆可視的事柄に囚われた霊性から、私たちは解放されます。主が先頭に来ていないと、思考も行動も揺らぎます。信仰は契約関係に依るので、神の前に何をするかではなく「どう在るか」です。御言葉から主との遠近感を捉えると、悪霊の動きや聖霊の助けが判ります。

②「充足」（１節後半＆６節前半）

「主は私の羊飼い」の結果として、「私は乏しいことがありません」となる。契約関係といえども奴隷の霊性ではなく、心身共に健やかに満たされます。「わたしはぶどうの木、あなたがたは枝」(ﾖﾊ 15:3)ただ幹に繋がるだけでなく、果実が当然のように生まれ、収穫しないと腐るほどに豊かな実が生まれます。

③「糧」（２節＆５節）

主の祈りにあるように、日毎の糧を通し主は満たしを与えてくださいます。敵を前にして主が備えてくださるのは、飛び道具ではなく日常的な恵みです。上げ膳据え膳＆あふれる杯に酔いしれ、主は十字架の前夜祭を敢行しました。

④「義と回復」（３節＆４節後半）

「生き返らせる」は、「向きを変える」「悔い改める」「捕囚から帰らせる」意で、以上の①②③の順に、主のものとされ恵みに与っていることを心底理解して、それから義と回復が導かれます。悔い改めすら自分の決心でなく主の御業で、羊飼いなる主は柵の中の羊に対して、罪や逸脱の全てに贖いを適用されます。

⑤「試練と臨在」（４節前半）

義の道の行先が死の陰の谷なる十字架なら、決してハッピーな道ではない。本項が谷間に位置するのは、谷底でも「あなたがともにおられますから」と、勇敢さや経験値ではなく、いかに臨在信仰を告白できるかが大事だからです。苦難が信者を成長させます(ﾛﾏ 5:3-4)。この谷で主の取り扱いを受けながら、それでもそこに主が導かれるなら向かうのが、羊であり羊飼いの生き方です。

1 月 31 日

「御国の民として②」

ピリピ 3：20～21
武安　宏樹　牧師

されど我らの国籍は天に在り」(文語)なんと希望に満ちたことばでしょう。晩年のパウロが獄中で記した手紙ですが、繰り返し登場するのが「喜び」です。無理に喜んでいるのではなく、本章には割礼派と思しき不信者への嘆きも。されど喜べと繰り返し筆を置く(4:4)。その源はキリスト賛歌です(2:6-11)。パリサイ人としてローマ市民として使徒として、彼には栄誉がありましたが、そういったことは塵芥(ゴミ)同然と、ただキリストに在る喜びが占めていました。その喜びの中身は、過去におけるキリストとの出会い、現在における結合、のみならずキリストと同じように自分も復活し、究極的救いに入れられると、未来からも逆算する三方向あり、神の永遠の視点からは包括的な恵みです。「しかし､私たちの」は明らかに前節の「その人たちの」と、対照されています。彼らは不信者を指しますが、私たちもパウロ同様に地上のものを塵芥(ゴミ)として、自覚できるか問われます。「しかし」は本来は「なぜなら」と訳すべき語ですが、本書全体のキリスト賛歌と喜びの流れから、「なぜなら私たちの国籍は天にあるから」とすれば合点がいきます。彼の熱気で論理が飛躍したのでしょう。

「国籍は天に在り」つまり信仰者は天国人であり、地上では寄留者に過ぎず。これが聖書全体の思想でありパウロの言いたいことです。国籍は市民権とも訳せますが、いろいろな権利や恩恵がより具体的＆行動的に思えてきます。天の名簿には古今東西全聖徒の名が刻まれ、アブラハムもモーセもパウロも。地上に現に生きる者も召天者も離脱者も、これから救われる者さえ記載され、ただ事務的に名前だけでなく、凱旋の暁には主イエスに迎えられて生き様も死に様も、顧みられないことも苦しかったことも、面談＆評価してくださる。「あります」は現在形で、代々の聖徒だけでなく私たちの名も記されています。その霊的事実から、パウロは天＆地、過去＆現在＆未来の連続性を訴えます。「待ち望む」も現在形で、再臨が突如でなく身近さと緊張感が伝わってきます。この動詞は中態で、再臨を待望しつつ私たちも復活のからだの完成を期する、密接なつながりを表現します。「変えてくださいます」は漸進的聖化ではなく、その暁にある栄光のからだに一変させる完成です。「卑しい」＝「低く」(2:8)。「国籍」の動詞形は「生きる」です。そこから聖霊の傾注があり力が沸くのです。

2 月 7 日

「栄誉の求め方」

ヨハネ 7：14～24

武安　宏樹　牧師

18 節が中心聖句です。原語「栄誉」は共同訳や文語訳では「栄光」と訳されて、神の御性質にも人の栄誉にも用いられることから、双方はつながっています。「人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。」と、ｳｪｽﾄﾐﾝｽﾀｰ小教理問答 1 にあり、人生の目的をどこに向けるかが大事です。ユダヤ人の場合は神の中に生きるのではなく、律法を一段一段上がっていき、まず神より自分を高めようとしました。名声を得るため競争心が生まれます。主の弟子たちが誰が一番で師匠に認められるか、気にしていたのも同様です。自分を磨くのがＮＧではなく、神の栄光を知って結果的に高められるのです。

一つ目に神の栄光が最も現され、他の神々や人類に不可能なのが創造です。「天は神の栄光を語り告げ～」(詩 19:1)一般恩恵の根拠となる御言葉ですが、創造の恵みを知ると、「主の証しは確かで浅はかな者を賢く」(詩 19:7)します。自然の中に生き、人間関係の中に生き、政治＆社会＆風俗の中に生きている。以上いずれも人間がゼロから造ったものは皆無で、被造物を利用しています。利用するだけだと束の間の幸せに終始しますが、持ち主と仲良くなるならば、もっと深い奥義を悟り、神のメッセージは聖書と祈りだけでないと知ります。神に取り囲まれる自分を自覚をすると、自己中心でいられず謙虚になります。そこに聖霊が人格が整えられ、神の栄光が冠となり人々が集められるのです。

二つ目に神の栄光が具体的に見える形で介入するのが、救いの御手です。旧約時代最高の救いは出エジプトですが、民は徐々に恵みを忘れていきます。長く信仰生活を継続するには、単に求めるだけ、律法的に励むだけでもなく、砕かれながら救いの体験継続が必要です。聖霊の恵みでエンジン回転の度に、爆発運動のように大なり小なり救いを体験することで、昨日も今日も救われ、難題が解決します。祈った通りも逆もありますが、いずれにせよ感謝します。「神が人間を創造された目的に自覚的に奉仕することが、即ち人間の栄光」と、教理問答講解にあり(J･G･ﾞｳｨｽ)、救われながら栄光から栄光へ変えられます。最後に救いの栄光は日々の生活の満足に非ず、十字架に極められています。捨てる者が見出す逆説的表現で、主は在り方を語られています(ﾏﾀﾀ 16:24-25)。

2 月 14 日

「この人がキリスト」

ヨハネ 7：25～31
武安　宏樹　牧師

本日のテーマは「どこから来たのか」(27 節)、「どこの出身か」(共同訳)です。以上を主イエスも否定しませんが、全き神の子＆全き人の子の二性一人格は、御言葉をそのまま受け取らないかぎり、人の頭では理解不能ですが(12:40)、ヨハネは目で見て手で触れた福音として、交わりから語っています(Ｉﾖﾊ 1:)。私たちも人と接する際、出身地＆生い立ち＆学歴など聞きたがるものですが、とかく人間は時間＆空間の、「いつ＆どこで＆だれから」といった５Ｗ１Ｈに、拘束される存在です。主イエスの返答は何か禅問答のようですが(28～29 節)、直後に人々が捕らえようと躍起になる様子から、挑発的な答をしたようです。原語「来たのか」は英語'come'でなく be 動詞で、存在の出自が問われています。この be 動詞が７回繰り返されると共に、主イエスは一人称「わたし」を多用し、連結すれば神の存在を表す、「わたしはある＝'I AM WHO I AM.'」(出 3:14)を、自称したも同然で、出自に拘束されない万物の根源たる存在と公にしました。

「神は、ご自身のうちに、御自ら全てのいのち＆栄光＆善＆祝福をもっておられ、ご自身だけで、またご自身にとって全く充足しておられ、彼が造られたどの被造物をも必要とせず、それらから何の栄光を得てくることもなく、ただご自身の栄光を、それらの中に、それらによって、それらに対して、またそれらの上に表わされる。彼は全ての存在の唯一の源であ り、万物は彼から出、彼によって成り、彼に帰する。」(ウェストミンスター信仰告白 2-2)

世の宗教は人が死ねば仏や神々になり、あるいは生きながら霊が憑依して、人でありながら人を脱する、人が偉くなり延長線上に神を擬制する教えです。けれども聖書は神が神でありながら人となられ、創造本来の人の姿に回復し、脱人間でなく、人であることを神が愛し受け入れたように生きる価値観です。ややもすると'I AM WHO I AM.'は、「俺は俺だ！」のエゴイズムに見えますが、反対に自分の分際を弁えて生きれば、社会的承認は得られますが面白くない。キリスト者は隣人愛の実践のため、謙遜と自己犠牲で枯渇の危機に瀕します。しかし内住の御霊により、「わたしはある」御方の自己主張が解き放たれる時、神の永遠＆全能＆愛＆知＆美から、己を見て隣人を見ることができるのです。主イエスの二性一人格と同様、私たちも人でありながら神の子として(1:12)、世に生きることを喜びつつ、永遠の昔に救いに選ばれ時至り産まれ(ｴﾍﾟ 1:)、聖霊の賜物と使命から力強く生きて、やがて天に凱旋する二重国籍の民です。

2 月 21 日

「見つからない救い」

ヨハネ 7：32～36

武安　宏樹　牧師

契約の民として導かれてきたユダヤ人は、旧約時代には不平と偶像礼拝に、新約時代は福音に耳を傾けようとしない、頑なでプライド高き民に見えます。旧約＆新約時代から中間時代や現代に至るまで、ユダヤ人について考えます。民族の祖アブラハム＆イサク＆ヤコブの族長時代から、モーセ＆士師の神政、そしてダビデ＆ソロモンの王政時代に、イスラエル国家は頂点を迎えますが、信仰の堕落と共に国も分裂＆衰退し、ついには捕囚にて亡国の民と化します。帰還以降の中間時代は政治の変遷に影響されながら、現地の民も離散の民も、会堂中心の礼拝を守り、ローマ帝国各地で 450 万人が耐え抜いてきました。主イエスの伝道対象はユダヤ人で、初代教会になってからパウロらによって、異邦人伝道が開始しますが、歴史的にユダヤ教の基盤無しに進展はあり得ず、今となっては私たちを含めて異邦人キリスト者の方が、はるかに多いものの、彼らに接ぎ木された者に過ぎません(ﾛﾏ 11:)。パウロは肉にある同胞として、どれほど主に愛されて真の救いに出会うことを期待されているか、台木から切り取られても再び接ぎ合わせようとする慈愛を、彼は涙ながらに訴えます。

しかし紀元 70 年に神殿焼き討ち、135 年にローマ皇帝がエルサレムを破壊、この時点でユダヤ教とキリスト教は袂を分け、以降回心者は少なくなります。4 世紀の国教化で両者の立場が逆転し、中世の十字軍では追放や改宗強制が、宗教改革期では当初寛容だったルターさえ、頑なさを見て迫害の論調に転じ、在留ユダヤ人の中心ポーランドではカトリックにも疎まれ、19 世紀ポグロム、20 世紀ナチスでは全ユダヤ人半数の 600 万人が殺され、シオニズムが加速し、三度の中東戦争からテロへ、現にパレスチナは世界の弾薬庫と化しています。世界各地のユダヤ人は優秀さと打たれ強さで、米国ほか影響を与えています。終末の前兆として彼らの回心はいつの日か。主の憐れみを求めるばかりです。「その血は、我らと我らの子孫とに帰(き)すべし」(ﾏﾀ 27:25)と言い放った彼らに、刈り取りとはいえこれほどの血が流されたことに、神の聖さを覚えますが、異邦人には途上国に至るまで宣教が成された今、ユダヤ人が遺されています。「エルサレムの平和のために祈れ」(詩 122:)偏見と痛みを越えた交わりこそ、福音の本質です。破れ口のため祈り、新しいエルサレムを証ししましょう。

2 月 28 日

「生ける水の川」

ヨハネ 7：37～39

武安　宏樹　牧師

荒野の収穫感謝を覚える仮庵祭最終日、クライマックスで主に感謝せよと聖歌隊が賛美する中で、「人もし渇かば我に来りて飲め」(文語訳)と主は叫び、その声はそこにいる人々だけでなく、全地全史上の民へと響き続けています。「生ける」は永遠のいのちの意で本書の鍵語、「水」は各章に救いの表象で登場、「川」はヘルモン山からガリラヤ＆サマリア経由で、エルサレムへと流れます。この招きは捕囚前から絶えず語られてきましたが(ｲｻﾞ 55:1/44:3/ｴｾﾞ 47:9)、渇きを認めて「口を大きく開いて」(詩 81:10)、受け止めたのが私たちです。そこへお茶やコーラなど日常の飲料でなく、他の神々や哲学も違和感を覚え、死の恐怖に苛まれる私たちの面前に、救いの激流が汲み放題差し出されます。「飲みなさい」救いの招きの瞬間だけでなく、継続的に「飲み続けなさい」の意。生ける水の川が「腹から」(直訳)沸きあがり、自分の腹が黒かろうが関係無く、きよめの泉が内在します。旧約時代は天地創造に参画し預言者＆祭司＆王に油を注ぐも見える部分は僅かだったのが、御霊は新約時代は目に見えて働き、ペンテコステ預言の通り、信じる全員へ内住が宣言されました(ﾖｴ 2:29-29)。

御霊に満たされた信者が他国語を語る姿に、酒酔いと怪しまれるも(使 2:)、脳から舌に回る影響で、高慢な唇が悔い改めの告白で謙虚と化し賛美が満ち、パウロ曰く「御霊に満たされなさい」(ｴﾍﾟ 5:18)と、こちらも継続的時制です。アルコールは数時間で抜けるも、御霊は口を閉じなければずっと酔えますし、私たちの内に御霊が居られ、御霊の内に私たちが居るとは素晴しい恵みです。そのような霊的生活を共にしている人は少なく、自分の律法で達成度を計り、敗北感に苛まれる人が多くいます。私たちの心の内は渇いているでしょうか。「わたしは渇く」(19:28)主は十字架上で息を引き取られる直前に呻吟しつつ、主を知らぬ者が身も心も干からび脱水症状で、息絶える苦しみを負いました。死の瞬間に神殿の幕が上から下に裂かれたことは、御霊の降臨を表します。つまり主が全ての罪を代償された如く、私たちも全身の罪を認めることです。そこへ罪の全リストが上から下へ破り捨てられ、赦しの御霊が噴出します。渇きを隠さずに、今日も御霊が生活の諸問題に届くよう期待し祈りましょう。「川」は複数形で恵みが自分に留まらず、諸国の民へ流れ癒やします(黙 22:)。

3 月 7 日

「意見の分裂」

ヨハネ 7：40～44

武安　宏樹　牧師

伝道集会で講師による救いの招きに対し、語られていることが是か非かと、表面的＆感覚的議論に終始しているのが、本日の箇所に登場する群衆三様で、聞きかじりの聖書知識と風評で絶えず流され、結局は宗教的無関心であり、ひいては「十字架につけろ!」と叫び続ける、群衆心理の原動力と化しました。これにピラトも降参、弟子たちも呑まれる一方、ピラト＆ヘロデは宥和して、主ひとり孤立して全人類が敵する悪魔的一致です。一致は良いことと限らず、反対に分裂が悪いとも限りません。主は「平和ではなく剣をもたらす」ために世に来られました(ﾏﾀ 10:34)。社会命令＆律法の下で父母は尊ぶべきですが、家族の反対で信仰を捨てては、救いよりも家の分裂を避けたことになります。御言葉に従うことが平和をもたらすと限らず、分裂を伴うこともありますが、いずれにしても自分のこととして掘り下げて受け止めると、救いといやしの御霊が働かれて、表面的に分裂しても信仰による平安と確信で立てるのです。使徒団パウロとバルナバ間「激しい反目」(使 15:39)は、消耗したでしょうが、分裂もポジティブに考えれば、二つの宣教チームに増殖とも受け取れます。

創世記には罪の萌芽がアダム家を引き裂いていく一方で、単一言語のため、人間の叡智を結集し天にまで届く、神無き「全人類帝国」を画策しだしました。そうすれば自分たちは偉大だと世界に誇り、富と名誉の集中も可能になる。罪人が一致して考えることは、ことごとく神の御心と反対方向に暴走します。神は下りて来られ、偽りの一致を分裂させ塔の建設を断念させます(創 11:)。とはいえ散らされ分裂したままなのが、御心かというとそうではありません。真の一致のために散らされたのです。アブラハムは故郷を離れ、ロトと別れ、ヤコブは追われ、ヨセフは売られ、モーセは流され、信仰生活は旅人生です。礼拝しながら律法に依り頼みながら、時至りて引き裂かれた兄弟は縫合され、主との信頼の絆は結ばれていく。神と人、人と人とは御霊が結び合わせます。社会生活のストレスは人間関係、精神的不調は神人関係から多く発しますが、どんな類の人にも御霊の注ぎは、救いと賜物を注いで一致の喜びを与えます。私たちは生ける水の源泉たる深みから神の臨在を受け止めながら(37-39 節)、心を引き裂いて神の愛と知恵を静思し、隣人を愛し受け止めたいものです。

3 月 14 日

「神の御顔ペヌエル」

創世記 32：24～30

佐藤　賢祐　師

①ベテルから 20 年後

ペヌエルは神の御顔の意。神と対峙し御顔に照らされ御顔があらわされる、その所に祝福があります。「神よ、私を祝福してください」と求める人を、神は必ず祝福されます。ヤコブの信仰生活の起点ベテル～約 20 年の場面です。

②ハランでの 20 年　※31 章 3 節→ベテル以降ヤコブに語られた御言葉。

兄エサウの復讐を恐れたヤコブは叔父ラバンの元で働いて、この 20 年で、家族と財産が与えられた背後で、ラバンとヤコブとの知恵合戦があり、ヤコブには、自信の内側にある弱さとの葛藤の日々だったことと思います。

③神のことばに従っていく

ヤコブに人間的な弱さが多く存在しましたが、彼の考えと生き方の根本は、「主が語られた言葉に聴き、その道を歩んでいく。」真の神を信じるぶれない信仰です。御言葉に従い 600 ㌔先にある故郷ベエルシェバと向かいました。

④神の陣営マハナイム

マハナイム＝二つの陣営。「ここにも神はおられる」ヤコブの信仰告白です。20 年前同様、旅の途中で御使いを通して語られた主の言葉、主御自身がこの場所におられることを思い返していたことでしょう。→32 章 9-23 節

⑤神との格闘→ヤコブからイスラエルへ

神と対峙したヤコブは、ももの関節が外れてもひたすらこの方を求め続け、一信仰者が真剣に神と対峙した時に「ヤコブ」⇒「イスラエル」、神と戦って勝った者へ名前が変えられます。ももの関節を打たれ、圧倒的に敗北するも、神はこのヤコブに、あなたは勝利した者であると言われたのです。→30 節

⑥打ち砕かれた者の歩み（33 章 3 節）

名前が変えられる前と後の心境に劇的な変化がありました。エサウを恐れ、陣営の一番うしろに陣取っていたヤコブは、自ら彼らの先に立って進みます。

⑦神に祝福されている者の歩み（33 章 3 節）

真の神と対峙し祝福を求めていくときに、必ず神ご自身が御顔をあらわし、その人を祝福する！という約束が、ここにいる私たちにも与えられています。主に祝福されている民。イエス様によって罪覆われ、永遠のいのちを与えられ、その永遠の恵みに、一日一日、一時一時を歩む者としてください。アーメン！

3 月 21 日

「正論と反論の間で」

ヨハネ 7:45～52

武安　宏樹　牧師

久々にニコデモ登場。３章での彼を一言で表現すれば「夜の訪問者」でした。身分も立場もあるので白昼公然とはいかずとも、明らかに心動かされており、他のパリサイ人の揚げ足取りや中傷とは違い、謙虚かつ率直に質問しました。理解に至らぬ部分は「どうして」(3:9)と突っ込み、無知を驚かれても今回の弁護を試みるところに、真理を求め続ける資質を垣間見ることができますが、結果的には主と同じくびきは負えなかったようです。何もせずに帰って来た、下役たちと同列に扱われるのは、両者ともその他大勢の類に留まるからです。とはいえニコデモの存在が是か非か問うことが、著者ヨハネの目的ではなく、彼としては世の中全て敵に回す覚悟で、最大限の正論で疑義を申し立てます。

これに対するパリサイ人たちの再反論は、「お前バカじゃないの？」でした。再々反論に及んだかは記述がありませんが、口を真一文字に結んだでしょう。ジレンマを抱えるくらいなら、尻まくって肩書も投げ棄てればと思いますが、それが出来なかったのは、結論から言えば「信仰が足りなかったから」ですが、これは非常に辛辣かつ、だからどうすればよいのかと違和感の残る言葉です。彼の何が足りなかったのか。具体的には「バカになる」ということに尽きます。「お前バカじゃないの？」に「バカで何が悪い！」と、正論で返そうとはせずに、逆ギレしてもよかったのです。「イエス･キリストを弁護するにあたっては､知的に優れて小賢しいより､無鉄砲でも情熱的である方が良い。」(W･ﾊﾞｰｸﾚｰ)

熱くなって啖呵を切れば、己の信仰を貫けるというわけではありませんが、聖霊の働きは正論を筋書通り語るだけでなく、時に感情の発露もあるのです。無学でも直情径行的言動で幾度も御叱りを受けながら、成長していったのが、ペテロではないでしょうか。彼は山上で幻に感化されて祠を三つ建てますと、主のため良かれと懸命に頓珍漢な発言をしたり、苦難を前に勇ましいことを言わなければ(ﾙｶ 22:33)、偽証＆言行不一致の誹りを免れることが出来ました。「バカ丸出し」なのが彼の最も素晴しい資質です。主の前に義人は皆無ゆえに、「ありのまま」こそ、失敗から自分の罪を直視し悔い改めの実を結ばせます。小ぢんまりした信仰でなく、チャレンジとダイナミズムでぶつかりましょう。

3 月 28 日

「砕かれた霊」

詩篇 51:17

武安　宏樹　牧師

① だれが砕かれたのか？

表題の如く、ダビデが部下の妻と姦淫を犯したことに関してで(Ⅱｻﾑ 11:)、本篇は彼が自身の罪深さを認めて、神に赦しを乞う祈り＆交わりの詩です。言うまでも無く彼は、旧約史上アブラハムやモーセと同等の信仰の巨人です。士師である前二者と異なるのは、個人的信仰と国家的権力で戦い勝利して、一介の羊飼いから世界中に彼の栄光が轟く頂点まで、上り詰めたことですが、そんな最高の王が転んでしまった。これは彼一人に留まらず系図の汚点です。アダムに端を発す原罪の忌まわしさを、最高の王が露呈してしまったのです。

② 何を砕かれたのか？

預言者ナタンの指摘に罪を認め、選民のリーダーが罪人の頭と認めました。否定も処刑もしなかったダビデは、世の栄誉を失うことは問題とは考えずに、神との個人的関係という信仰の栄誉を砕かれました。内なる聖霊が去られる、恐怖に震え以前の勝利の生活から転落し、惨めな敗者としてすがり祈ります。本篇は「赦してください」でなく、「あわれんでください」で始まります(1節)。情状酌量を乞う材料も無く、神のあわれみ以外に存在意義無しとの告白です。頻出する「私」「あなた」の深い関係の中で、自分の罪として受け止めながらも、へりくだる者を看過されない、神のあわれみだけに望みをおきます(6節)。

③ だれによって砕かれたのか？

聖なる神の御手で砕かれた。換言すれば、自分で自分を責め砕くのでなく、他人のせいにもせず、自分が罪を犯し家族を傷つけ敵に侮りを起したことを、その全てを支配され裁かれる神の御手に、自分の存在と責任を委ねています。「造り」は創造の意(創 1:1)。洪水の如く全て沈め造り直す再生を意味します。私たちキリスト者にとっては、聖化で表現される神の御業です(Ⅱｺﾘ 5:17)。この事件以降ダビデは家族の不祥事に遭うも、王権は神が祝福されました。さらにバテシェバとの間に生まれたソロモンに知恵を与え、国力を増し加え、略奪婚の汚点すらも、神のあわれみと真実な悔い改めが歴史を変えました。私たちは罪を犯さないよう努めつつ、犯してしまったら砕かれ悔い改めれば、より成長します。ダビデも貧しいやもめも(ﾏｺ 12:42)同じ恵みを受けました。

4 月 4 日

「地殻変動」

マタイ 27:51-54

武安　宏樹　牧師

① 「神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた」(51 節)

この幕は聖所と至聖所を隔て(出 26:31-35)、奥の至聖所は大祭司が年 1 回、全イスラエルの民の贖いのため入るのを許され、契約の箱が安置されている、臨在の場で(ﾍﾌﾞ 9:)、一般の信者は神の本質を知ることができませんでした。いったん壊れた神と人の関係を建て直すために、旧約時代は時間をかけて、霊的指導者たちが信仰によって橋を架けるように、献身的に仕えてきました。時至って御子が来られたことは、父なる神が刻々とタイミングを計りながら、罪の代価の総決算に非常な苦しみを承知で、「上から下まで真っ二つに」して、全焼のいけにえを受け取られ、これで私たちは憚ることなく至聖所までも、入ることが許され、生命的結合は「キリストのうちに」と表現されます(ｺﾛ 2:)。

② 「地が揺れ動き、岩が裂け、墓が開いた」(51～52 節)

著者は時間的順序でなく、幕が天から裂けて地上が震え地下が開くという、霊的流れを描いたのでしょう。全地の震動はシナイ山の光景ですが(出 19:18)当時を思い起こさせつつ、終末の前味を一連の出来事で全て見せたのでした。よって主の死に伴う出来事というより、復活に伴う出来事であると言えます。臨在の拠点が破壊され、墓が効力を失い、罪の贖いの次に死が克服されます。「聖なる人々」の範囲は不明ですが、主が先陣切って聖徒を連れて帰るのです。キリスト者は死に打ち勝った民。地上で生きるだけでなく、天でも生きます。だから昨今の地震や疫病に心を奪われずに、永遠の価値観で生きるのです。

③ 「百人隊長や見張りの人々が十字架の初穂となった」(54 節)

「本当に」はヨハネ福音書で 40 回以上登場し、「真理」「真実」とも訳されます。百人隊長たちは異邦人であり、律法も聖所もよく知らなかったでしょうが、主が語られたことと起こったことが、その通りの真理であると告白しました。主は死んで栄光を現された後の異邦人の救いまで、視野に入れていました。地揺れ岩裂け墓開くだけでなく、滅びに向かう異邦人の魂が揺り動かされて、霊的地殻変動が起きた。私たちは聖書信仰者として聖霊に在る生き様と共に、死に様を見る人々に影響を与えて、そこに神が働かれ地盤が揺さぶられます。

4 月 11 日

「さばきを下さない」

ヨハネ 7:53-8:11

武安　宏樹　牧師

主イエス＆姦淫の女＆パリサイ人たちが、トライアングルで絡み合います。本日のキーワードは「人権」。法の目的は権力者の恣意的暴走を縛ることで、弱者を守ることです。それによって社会＆組織に自由な信頼が醸成されます。けれども引きずり出された女を取り巻く、律法学者＆パリサイ人たちの心は、律法の専門家でありながら弱肉強食の餌としか見ない、獣同然の恥知らずで、彼らの目的は女を餌にイエスを窮地に追い込み、抹殺することにありました。①姦淫の死刑不可避(ﾚﾋﾞ 20:10)、②ローマ支配下での処刑は反逆罪に問われ、③赦せば姦淫容認で指導者失格。以上選ばず白旗挙げれば敗北宣言に等しく、罠を仕掛け、主イエスをにっちもさっちもいかない苦境に陥れようとします。

救い主が救い様の無い地獄絵巻の如き光景が、眼前に展開されていました。薄笑いを浮かべ喚き続ける彼らを尻目に、主が下向き地面に文字を書くのは、彼らと調子を合わせない抵抗の表明と共に、現状を悲しんでいたのでしょう。早朝から祈り備えて、その実が想定外の逆質問で厚顔な彼らを撃ち抜きます。「ならば御宅方で始末しては？　ただし罪の心得が全く無い方に限りますが。」何という名回答！ギャフンと言わされた彼らは、ぐうの音も出ず退散します。年長者から白旗挙げては若手が残るべくもない。いや年長者ほど業が深いか。「権威と名誉がすぐれている度合いに応じて、それだけ自分の有罪性を痛感したということ」(ｶﾙｳﾞｧﾝ)御言葉が彼らを貫通し、勝利を収めます(ﾍﾌﾞ 4:12)。

第一関門突破も、第二関門こそ失われた羊を探す主イエスの本分でした。女の罪を帳消しにしたと誤解されがちですが、安直な赦しを与えたのでなく、「執行猶予」(ﾊﾞｰｸﾚｰ)を与えて、以前同様に罪を犯し続けるなら未来は無いが、悔い改めてわたしと共に歩めば、罪赦され罪を遠ざける生活に更生可能と、彼らのような過去への断罪に留まらず、弱さに対する深く広い視点と同情で、これからどのように立って行くべきかを模索する、前向きな期待をかけます。「自由な人として質問～人として丁重に～将来を考え～救う心構えで」(ﾃﾆｲ)　安易にさばかない主の愛に学びましょう。悪霊は高慢＆頑迷＆断罪を好むも、主イエスは「愛、喜び、平安、寛容･･･」(ｶﾞﾗ 5:22)の聖霊の実を与えるのです。

4 月 18 日

「わたしは世の光です」

ヨハネ 8:12:20

武安　宏樹　牧師

「われは世の光なり。我に従ふ者は暗き中(うち)を歩まず、生命(いのち)の光を得(う)べし。」(文語)この御言葉に今までどれほど多くの人が救いと希望を、受けたことでしょう。光という語は太陽＆月＆電気など物質的のみならず、精神世界を想起します。日の出を拝む御来光、光のうちに自ら投影する御来迎。山頂に祠もあります。そこに辿り着くまでの闇の中では懐中電灯や、月明かりが頼りになります。一方でいくら日が昇れども、外に出られない心の闇を抱える人も多くいます。そのような闇と罪の縄目に苦しむ人々に、光を届けるのが私たちの努めです。創造第一日目の御声「光、あれ」以降、空間と時間が分化し発展して行きます。けれども本書の「光」は創造以前に、永遠の昔から在す三位一体の神の光です。この光はいかに世界が闇に包まれるとも、消えることなく現在進行形で輝き、悪しき力が総力戦で御子を潰そうと挑むとも、十字架上で打ち勝った光です。「非常によかった」(創 1:31)被造物全ては、美しいいのちの光を宿しています。堕落以降は虚無に服すとはいえ、信者も未信者も神の光を宿すべき作品です。「震える者＝クェーカー」信徒は、個人的体験から「内なる光」を説きました。

パウロ同様に、罪人は御言葉に震える強烈な回心体験も必要と言えます。新興宗教に「光」がつくのが多いのは、教祖が悟りの光を求めた所以でしょう。近年は入信に至らず、パワースポットを手軽に巡る「霊的つまみ食い」の方が、流行るようです。信者＆不信者とも共通して、体験ばかり目的とするのでは、信仰が成長しないばかりか枯渇します。むしろ体験し続けて感謝にあふれる、信仰者としての在り方が大事です。「闇」は悪しき力と屈服させる罪のことか。けれども闇を闇と思わず主に従い続けたら、月に照らされ道は見えてきます。光が無いと思う人が求めるのと、常に在ると確信してさらに求める人とでは、大違いです。神の語り掛けを特別啓示、創造の恵みを一般啓示と呼びますが、神の語り掛けを通して、自分が光輝く信仰の器とされていると知りましょう。未信者に「あなたは罪人！」でなく、「あなたは神の作品！」から語りましょう。光が「無い」ではなく「隠れている」。その覆いを取る方こそキリストなのです。「今は、主にあって光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。」(ｴﾍﾟ 5:8)以前私たちは暗闇でしたが、光とされたからこそ光の子として歩めるのです。

4 月 25 日

「人生の様々な闘いの中で　勝利の為まずすべきこと」

Ⅱ歴代誌 20:1-4, 12-23

鄭 南哲　師

シャファテ王の出来事を通して、人生の思わぬ様々な戦いに直面して問題に 巻き込まれている時に、その状況をどう逆転させ、遂に打ち勝つことが出来るか、そのためにまずなすべきことは何なのかを学び、実践して行きたいと願います。

①勝利するため第一の原則：まず、敵を正しく見極める必要がある（１節）
まず、戦うべき敵をしっかりと見極めなければなりません。敵がだれなのかを、正確に把握しない限り、私たちが人生の戦いに勝利することはできないでしょう。 本当の敵は、意外にも自身の態度によることが非常に多いのではないでしょうか。私たちを落ち込ませる原因は「人や状況そのもの」より、むしろ「その人や状況に自身がどう反応するのか」という、自身の態度にかかっている場合も多くあります。

②勝利するため第二の原則：神の前で自分が不十分であると素直に認める(12 節)
なぜ彼は恐れたのか。自分の力では、全く希望の持てない＆見えない状況に直面していたからです。彼は主に自分が不十分であることを認めています(12 節)。全能の父の御前で限界･弱さ･不足を正直に認める人こそ、助けと力を頂けます。

③勝利するため第三の原則：問題をすぐ神にゆだねる（３～４節）
彼は問題をすぐ神様にゆだね祈りました。「神にゆだねる」とは神様に向かって問題を打ち明ける事、祈ることを意味します。

④勝利するため第四の原則：神様に先取りの感謝をささげる（21 節）
彼は戦いの前に、すでに神ご自身が自分たちのため戦いつつ、勝利を与えて下さる事を確信し、先に感謝をもって賛美を捧げて、行進したことが分かります。その結果、信仰＆先取りの感謝の通り神は大きな勝利を与えてくださったのです。感謝は結果を見て、後でするものではなく、神を信頼して御力と御助けを信じて、いつも先取りの感謝を捧げなければなりません。そのためには、少なくともローマ人への手紙８章２８節と、ピリピ人への手紙４章６～７節の御言葉を信じなければ出来ません。是非、これらの御言葉をいつも心に刻みつつ、握りしめて先取りの感謝を捧げるみなさんとなりますように、お祈り申し上げます！

5 月 2 日

「どこへ行くのか」

ヨハネ 8:21-30

武安　宏樹　牧師

主イエスは御自身を証しするも、ユダヤ人は理解も受け入れることもせず、会話はかみ合いません。彼らは自分たちの生き残りのため殺害を企図します。為政者たちに吹き回り群衆を扇動し、一歩も引かない全面戦争の様相ですが、主イエスはそうではなく、敵対者をも救うため泥舟に浮き輪を投げています。なおも抵抗を止めない彼らの結末を、「自分の罪の中で死にます」警告するも、助け舟と泥舟は乖離して、船長が大声で叫ぶも彼らの耳に入らない様でした。前者は「上から」で後者は「下から」と、行先以前に所属が異なれば無理もない。「上」とは天＆神の国、「下＆世」とは地上世界の意で、間には断層が存します。この断層は罪に由来します。罪に蔓延した地上世界は神に背を向けるのです。

彼らは世の視点では「罪人」どころか「義人」です。聖書で意味する「罪」とは、悪行に手を染めているか以前に、神の前に強情張り意地でも罪人と認めない、浮き輪を投げられても受け取らない様で、逆にどんな者も信じれば救われる。心の柔らかさ次第ですが、救いを頑なに拒む背後に悪魔の惑わしが存します。最初の人が誘惑に屈し堕落して背を向けた結果、神は天と地を分離しました。この断層は人は越えられませんが、神は全ての霊界を相変らず統治しながら、地上に浮き輪を投げつつ救済計画を進め、最終手段に御子を世に遣わします。罪人のため死ぬことで断層の架け橋となり、天の扉が再び開かれるためです。そこに一旦入らば、もはや悪魔に引きずり出されることは無くなるのです。

私たちはキリストがどういう方か、信じる前に正しく知る必要があります。本日の箇所ならびに本書に頻出するのが「わたしが『わたしはある』である」、言うまでもなく父なる神の専権事項です。御子が語れば当然反発を生みます。万物の存在の根拠を示す同語に、惑わししか出来ぬ悪魔が嫉妬するからです。終わりの日に再臨の主イエスが天と地を統合して、信者を連れて帰る一方で、悪魔＆不信者は永遠の滅びに至ることも悟っています。サマリアの女(4:26)、嵐に動揺する弟子たち(6:20)、逮捕の兵士が聞いて昏倒(18:5)には単体で、他にも「いのちのパン」「世の光」「良い牧者」など、全て「エゴー・エイミ～」で、父だけでは不明瞭な性質を顕します。あなたはどこへ行こうとしていますか。

5 月 9 日

「真理はあなたがたを自由に①」

ヨハネ 8:31-38

武安　宏樹　牧師

多くのユダヤ人が信じたとありますが、どれくらい信じていたか問題です。一つ目に真理を知ることで、彼らは文字＆知識量と適用で生きていましたが、論理的＆神学的なのは良いですが、正しく適用されないと信仰に結びつかず、主イエスの「自由にします！」に過剰反応。あなたに言われる筋合いは無いと、喰ってかかります。もし心の底から自由ならそこまで強硬になる必要も無く、心の傷や神＆人への不信からの防衛本能から、心を固くしている証拠です。彼らに限らず私たちもそうですが、聖書知識＆神学的理解＆集会出席などの、信仰的美徳を守り通し平安を得る、文字＆経験に縛られていないでしょうか。経験も現在形で受け続けないと、過去に受けた文字の蓄積と化し縛られます。柔軟で潤った信仰の条件が「わたしのことばにとどまる」「弟子となる」ことでバークレーは弟子の要素として４つ、①絶えず耳を傾ける、②絶えず学ぶ、③絶えず洞察する、④絶えず従う。以上の結果として、①恐れからの自由、②自我からの自由、③評価からの自由、④罪からの自由。を挙げています。御言葉を神との間の管に運び、目を開き視点を再構成するのが御聖霊です。

二つ目に聖霊の働く器を整えることで、「うちに入っていない」(37 節)は、キリストを受け入れたけれども知識的部分だけで、浅い所で受け入れたので、種蒔きのたとえの如く岩地の隙間から芽を出すも、すぐ枯れてしまう様です。土壌が耕されているかが問題です。営業顧客「深耕」の原意は開拓済みの畑を、深く掘り起こして土壌改良に由来し、深まると互いに潤う関係に発展します。信仰も同様で、御言葉を受け止め聖霊の働きを理解する土壌が整えられると、根が深くなり器のヒビが修復され水が漏れなくなり、さらに拡げられると、より多くの恵みと賜物を受け取れるようになります。砕いて練り清めるのは、陶器師なる主ですが、心を開いて用意するのは私たちの側の努力といえます。「真理はあなたを自由にします」だと、私たちは何もせず待つ感がありますが、心の状態を点検しながら、最高の受け皿を用意することが求められています。それをどれくらい継続してきたかで、信仰年数を経れば雲泥の差となります。解放の御霊は現在進行形で働きますが、「知り」「自由に」は未来時制を用いて、徐々に現れ、聖霊を悲しませる罪を悔い改めると心は燃やされます(黙 3:20)。

5 月 16 日

「真理はあなたがたを自由に②」

ヨハネ 8:39-47

武安　宏樹　牧師

「真理はあなたがたを自由に」(32 節)前回は弟子となり器を整える必要からオモテ面を扱いましたが、本日は水面下の悪霊との「真理戦」からウラ面です。「霊的戦い」とは、個人的な悪霊追放や社会的な政治＆宗教体制への抵抗など、何か特定の「見える敵」を倒せば勝利すると、単純に捉える傾向がありますが、自分の信条を絶対化して視野が狭くなることに、注意しなければなりません。ユダヤ人たちは彼らだけが血統書付と認められることを、欲していましたが、主イエスは神の子として彼らに対し「あなたがたは悪魔!」と正体を暴きます。彼らに投げかけた痛烈な非難は、実際は背後で糸引く悪魔への一喝でした。いったい誰が彼らをここまで頑なに、イエスは神の子だと認めさせないのか。さらに反抗するだけでなく、自分たちを守るばかりに殺意まで抱かせたのか。これが偶像礼拝と不品行に耽る異邦人ならともかく、神に選ばれ律法を抱き、どの民よりも愛されてきた民であるならば、彼らの態度はあまりに異常です。その御言葉は惑わされている者を悪魔から引き離すべく、愛の叱責なのです。

悪魔は御使いの中から堕落して以降、エバを偽りで惑わすことに成功して、その子を兄弟不信から殺人に駆り立て、神無き人生を驀進し滅びに向かわせ、世界中を罪で汚染しました。最高の義人ヨブを神から引き離そうとした中に、その意図は明白です。不信者ではなく信者だからこそ悪魔の試練に遭います。されど堕落の直後に神は、両陣営の間に敵意を置かれること、やがて悪魔は滅びに定められていることを宣言されました(創 3:15)。ですから彼らと主が、激しい応酬を繰り広げるのは、救いの完成近しと悪魔が抵抗しているのです。「けれども神は、御力をもって彼を手綱で縛り、抑制し給うため、神が許可した範囲のことだけしか果せず、そして、欲するにせよ欲せぬにせよ、彼は己の創造主に服従するのである。なぜなら、彼は神が駆り立て給う時はいつでも、自分の任務を果すことに身を捧げざるを得ないように強制されるからである。」(ｶﾙｳﾞｧﾝ綱要)主イエスは悪魔には容赦なく正体を暴いて、人々には悪しき関係を清算して、創造主であるわたしに聞き従えと身をもって語りました。彼らに対する愛は、「父よ、彼らを赦し給え」(ﾙｶ 23:34)救霊の熱心は私たちの自由を罪人への愛へ困難な時代や状況の中でも、自らを犠牲にし喜んで奴隷となり実を結びます。

5 月 23 日

「私たちの交わり」

Ⅰヨハネ 1:1-4

武安　宏樹　牧師

聖霊が臨まれ地の果てまで宣教の記念日に、当教会 70 周年礼拝としました。書き出しはヨハネの福音書と本書は似ており、４つの時制で太古の昔からの、神の存在を強調しながら前者はキリスト論、後者は教会論で「いのち」を語り、１～４節は主動詞「伝えます」にかかりつつ、その目的は「交わり」へ向きます。教会とは何かという主題は、礼拝や宣教や祈りや教育など多岐に亘りますが、牧師の方針や教会の賜物で優先順位はあれど、以上包括するのが交わりです。分かち合いと称し茶飲み話を何時間も、時間の無駄と言う向きもありますが、聖霊の働かれる教会の交わりで心が開かれ、家に帰った後に罪が示されたり、霊的視野が広げられるならば、そこにキリストとの交わりが存在するのです。そのような創造的＆自主的な交わりこそ、この時代にも安定した信仰基盤を、当教会が有する証しです。内住の聖霊が兄姉⇒家族⇒友人⇒地の果てまでも、伝道して終わりではなく同心円状に拡がるのが、交わりのムーブメントです。直接会って同じ空気を共有して交わるのが最善ですが、それが適わなければ、オンラインも使えます。コロナだから出来ないという前に宣教協力のために、使徒たちが牢獄から手紙を送り、賛美で枷が外れる証しを経験したように、自分の頭で考え祈りつつ、萎縮しないであらゆる手段を駆使することです。

日本人はコミュニケーションが不得手で、心の内に隠された本音の表出を、受け手が即座に笑ったり裁いたり遮ったりしない寛容さで、良く耳を傾けて、話し手が受け止められたと感じると恵まれ、当教会にはその資質があります。　単に数字やプログラムを追求するだけでは、交わりは育たず心が枯渇します。当教会史を概観し、痛みの中で幾度の牧師交替や信仰継承に難儀した時代も、それでも互いに率直に愛し合う交わりがあり、信徒兄姉が支え続けたことが、毎年受洗者が若い層からも起こされ、地道に成長する今日の祝福の基盤です。昭和期に救われ支えた兄姉方は衰えど、信仰の実が耕して次世代を拓きます。地上の残された生が僅かでも、キリストの贖いが橋を架けてくださった以上、私たちは天につながっている民であり、天と地の間に、そして地上の間にも、「ディスタンス」は存在しません。目に見える交わりだけでなく時間と空間を、越えた霊的な処に、私たちキリスト者の目指す究極的な交わりがあるのです。

5 月 30 日

「死を味わうことがない」

ヨハネ 8:48-59

武安　宏樹　牧師

アブラハムの子孫であることを誇るユダヤ人たちに、主イエスは彼以前に、「わたしはある」神の自己認識を宣言し、彼らは悪魔にけしかけられたように、いきり立ちキリスト殺しの態勢に入ります。「真理はあなたがたを自由に」に敏感に反応した彼らの執着の正体を見極めると、私たちは自由を得られます。

一つ目に罪とさばきの力からの自由です。律法遵守を是とするユダヤ人は、表向きは神のため人のためと言いながら、自分の出世や罰を受けない目的に、いつの間にか変わってしまいました。パリサイ人たちが敵意を現したのも、律法を隠れ蓑にしながら、自分たちの罪が暴かれることに抵抗するからです。罪のメカニズムは特定の人種＆人物でなく、律法の背後で人の内に蠢動する、普遍的な欲情で(ﾛﾏ 2:)、「私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」(ﾛﾏ 7:24)パウロの告白から、ただキリストの十字架につながることでしか、真の解放が無いと悟ります。

二つ目に死の力からの自由です。肉体の死＆霊的な死＆永遠の死の３つを、聖書は語りますが、主イエスは以上の３つの死からの自由を語ります(51 節)。彼らの敬愛するアブラハムも過去形ですが、主イエスは天地創造のはるか前、アブラハムの時代も律法賦与も捕囚期も、いつも「わたしはある」と語ります。そしてキリスト者も肉体は死にますが、実質的に死を見ることがない者です。「死は彼らにとっては天の国への通路」(ｶﾙｳﾞｧﾝ)生まれたこと救われたことも血筋や経緯など地上の時間に縛られず、永遠の計画の中に位置づけられます。神の永遠の計画の中で自分を評価しつつ、優先順位を定めることが大事です。

三つ目に栄光を帰する自由です。主イエスは自分でではなく父が 100%の栄光を与えられたためありのまま証しし、十字架で最高の栄光を受けました。ユダヤ人たちは神の前に割り込んで、悪魔的手法で栄光を欲していました。この誘惑を主イエスは「主に栄光！」と退け、ヨブは主よ何故ですかと迫って、二人とも最後に栄光を受けます。私たちは自分が報われるよう急ぐ者ですが、いつどのように受けるか、契約の中に時宜に適い受けるべき栄光も含みます。

6 月 6 日

「昇天の恵み」

使徒 1:6-11

武安　宏樹　牧師

この世の生を終える語に「逝去」と「召(昇)天」があります。「逝く」「去る」は、どこか遠くへ二度と会えない感がしますが、昇天には目的地「天」があります。主イエスは十字架の前に弟子たちに「わたしが去って行くことは益」(ﾖﾊ 16:7)と語り、その心は「わたしが居ない方が、あなたたちは成長する」でしょうか。

主イエスは何処へ？エマオ途上の二弟子の目は、未だに塞がれていました。世の事柄で頭がいっぱいな彼らに、復活の主は聖書全体から繰り返し語られ、徐々に霊の目開かれ心燃やされ、地上の最後に心を開かせます(ﾙｶ 24:46-48)。苦難と復活は見た。それだけでなく「あらゆる国の人々に宣べ伝えられる」と、未来も語られます。それは主イエスが去り、弟子に丸投げするのでしょうか。

「しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。」彼らは聖霊の傾注を知らない訳はなかったけれども、それより伝えたかった。だから「離れないで、待ちなさい」(４節)と言われたのです。待つのは難しい。しかしただ待つのではなく、「聖霊を受けるまで」と具体的な約束を与えます。主イエスは天に上げられた。弟子たちは天を見上げ、奇しくも集中しました。その時に御使いは居座る彼らに叱ります(11 節)。天に帰られて再臨までの間、地の果てまで御国を拡大するという、壮大な任務を与えられたと気付きます。ようやく理解した彼らは祝福を受けて山を下りました。昇天は別れでしたが、寂しく気落ちしたのでなく、聖霊との歩み＆再臨の確信に喜び踊ったのです。

私たちは聖霊によって証しを委ねられた者。「証人」は「殉教者」と同義です。助け主＆慰め主＆弁護者の聖霊により、世界大の働きをなすことができます。ステパノ曰く主イエスは神の右の座で立たれ、見守ってくださいます(7:56)。地上では聖霊の恵みが、天上ではキリストがとりなし、天でも地においても、神の栄光は私たちを取り巻いています。あたかも見捨てられた状況の中でも、臨在の恵みを最も理解することができます。愛する友を失っても再会がある。それはうらやましいほどの喜びの別れです。昇天とは希望なのです(ﾛﾏ 8:38)。

6 月 13 日

「この人に神のわざが」

ヨハネ 9:1-12

武安　宏樹　牧師

往々にして人は、五体満足に生まれて来なかったのは何故かと詮索します。当時は罪が原因とされて、盲人は救い様の無い厄介者と思われていました。肉体以外にも家庭環境や精神疾患や、それ以前に人生の失敗やいじめなどで、人は多かれ少なかれ歪みを抱え、そういった人間的努力に限界を覚える人に、新興宗教は悪い縁を断つとか宇宙の原則とか、公式に当てはめようとします。

この盲人は弟子たちの眼中に無かったでしょうが、ご覧になる主イエスに、好奇の眼差しを送ります。「だれが罪を？」愚問ではなく彼らなりに考えます。そこへ主は弟子たちの予想を裏切って、「だれが」という因果関係には非ずと、彼らを正しました。ヨブ記で三友人がどれほど因果関係に囚われていたのか、罪を認めれば神の愛顧を得るとの正しく見えて、よく考えると本末転倒した、公式に私たちも奴隷となっており、盲人はどれほど苦しめられたでしょうか。欠けは多々あれど「だから駄目だ」と人間的な考えで、即決してはなりません。さばかれた当人は悲しみでいっぱいです。しかし本当の救いは神の視点です。

「この人に神のわざが現われるため」因果を打破する素晴しい神の原則です。欠けはマイナスではなく、神の恵みが働く余地が多いからプラスになります。これは諦念や積極的(ポジティブシ)思考(ンキング)と違い、他者である神がキリストを架け橋に自分と、つながる摂理の中に位置づけることで、神が私に何をされる愛の業の信仰が、正確に言えば信じて一歩踏み出し恵みを受ける数が、人を造り変えるのです。盲人は世間に見棄てられた自分にも、いやされるべき大事な人間と見なされ、泥から造られた人に息吹との、新しいいのちに満ちた創造をモチーフにして、感動しながら素直に御言葉に従ったことで、彼は瞬時に全くいやされました。

このいやしは誰に向けられたのか。もちろん当人にですが、神学的思考で、盲人の存在意義の是非を論じるだけの、弟子たち&私たちに再考を促します。彼が証ししたのは体験です。摂理がどう働くかは人の目には分かりませんが、彼は一発で、ヨブの霊の目は問答で時間をかけながら、神と自分を悟ります。パウロは信仰の延長線にいやしを望むも、弱さを誇る境地に開眼することで、逆転の発想を得ます(Ⅱコリ 12:)。弱さと苦難の数だけ恵みは増し加わります。

6 月 20 日

「だれが盲目か」

ヨハネ 9:13-23

武安　宏樹　牧師

前回は盲人(＝本人)の立場、今回はパリサイ人の立場からいやしを見ます。この者は誰か、そもそも安息日に行うこと自体が律法への挑戦であり不法だ、イエスを信じる者は即追放だ。群衆から聞いたことをもとに両親を問い詰め、それで証拠が得られなければ本人を再度呼び出すも、「あの方は預言者です」盲目が晴眼となった否定しようも無い事実から、臆することなく証しました。私たちは目が開いているか。以下のパリサイ人の霊性を笑えるでしょうか。

一つ目に神のことばを一見正当な理屈を用いて、反対者を断罪することで、立場が上の者が自分を誇示するために行い、下の者は右へ倣え式に従います。善悪の判断無しに下の者が言われたまま行うことを、「盲従」と呼びますが、両親は権力者を恐れつつ、されど息子の解放を喜ぶ相半ばする心が見えます。安息日を選んだのは、マニュアル化で骨抜きにする律法主義への挑戦でした。「人のために設けられた」(ﾏｺ 2:27)とは、肉体と霊性の健全さを保つ目的から、絶望感＆窒息感＆思考停止を解き放つ、真の安息を知ってほしかったのです。

二つ目に「光を憎み、光の方に来ない」(3:20)、「私たちは見える」(41 節)と強弁する霊性です。彼らは盲人と違い、明らかに主イエスが視野に入ります。自力で主イエスのもとに行き、誰より研究し、律法的に徹底追及しています。自分たちを脅かす看過できない存在ゆえ、各方面に圧力をかけ抹殺を試みる、「無駄な抵抗」の末に、聖霊のうめきに耐えかねて信じる者は多くいますが、パリサイ人は頑なに認めず、「進んで目しいた者になろうと」(ｶﾙﾋﾞｧﾝ)します。

三つ目に闇が光に最大限抵抗するため、偽装や多数派工作を試みる愚行で、両親の召喚も、息子の純粋さが親族を苦しめる結果になると思わせるためで、悪魔は偽りの君＆人殺しゆえ(8:44)、神の業の妨害のため手段を選びません。信仰があれば状況も整えられ澄み切った心で、証し出来ると思えば大間違い。反対や無関心に翻弄されます。善意も結果的に御業を妨害するなら重罪です。私たちは目の開いた者として、偽善･傲慢･転倒した宗教心を悔い改めるべく、御霊によって祈りましょう(ﾛﾏ 12:1-2)。単純率直な信仰が霊の目を開きます。

6 月 27 日

「単純な信仰」

ヨハネ 9:24-34

武安　宏樹　牧師

パリサイ人たちは盲人が見えると認めたら一大事だと、潰しにかかります。二度も呼び出すとは最後通告に等しく、権力者相手に世から抹殺されようと、非常にプレッシャーのかかる状況の中で、彼の信仰の真価が問われています。尊敬を集める宗教家が偽りの君となり、卑しい障碍者が真実を証するという､何とも皮肉で痛快なドラマ展開ですが､彼の証しは素朴ながら論理的です。神の子か罪人かの判断は留保した上で、盲目が見えるようになった事実から、体験談だけ述べて結果的に神の子であると浮き彫りにする、賢明な方策です。彼らは多くの教育を受け、神の知識を庶民の何倍も有することを誇りますが、瞬間的ないやしという彼らには異質な神体験から、物怖じしない証しを聞き、「何も知らないのに偉そうなことを！」と軽蔑に満ちた非難を言い放つ一方、 危機感を抱いたのではないでしょうか。「どのようにして」は詰問だけでなく、少なからず興味や嫉妬といった、彼らの一筋縄で行かない心理を垣間見ます。ヘロデが主イエスへ期待が裏切られると、攻撃に転ずると同様です(ﾙｶ 23:)。

聖書の「罪」には律法違反という法的側面の他に、的外れや歪みの意があり、まさしく彼らの霊性です。宗教家も政治家も神から与えられた権威をもって、治めていますが、心が神に向かわないと悪魔が自分の欲望へと転化させます。サウルはサムエルから王位剥奪預言を聞き、罪を悔い改めるも形だけでした。そのように神の愛と義を曲解して舌を出す霊性を、主は最も忌み嫌われます。人の心に未だきよめられていない、プライドや防衛本能や不信感があります。以上を罪として認め、まっすぐに主に向かって出して委ねることが出来るか。ダビデとの違いは、神への純粋さと御言葉を深く受け止める信仰の有無です。盲人は率直な物言いで、まっすぐに聞くことの大事さを訴えています(27 節)。彼は視力だけでなく、キリストと出会って真理による自由を得ました(8:32)。私たちは光なる永遠のいのちを、まっすぐ全身で受け止める者とされながら、その栄光を曇らせて御言葉を曲げるものが存在するなら、悔い改めによって、まっすぐにしていただきましょう。率直な物言いは疎まれることもあります。されど盲人の純粋な証しから、私たちも神の御手を探ることを教えられます。

7 月 4 日

「探し求める主」

ヨハネ 9:35-41

武安　宏樹　牧師

盲人のいやし最終回です。パリサイ人を恐れず単純率直な証しは会堂外に追い出される結果となりました。いやされた暁に通常の社会生活を願うなら、主イエスを呪ったでしょうが、彼は不遇でも喜びと恵みを忘れませんでした。「たしかに全く罪の中に生まれ教える筋合いも無い者ですが、神の預言者に出会った事実を伝えずに居られないのです」と偉い人を前に語ったでしょう。とはいえ視力と救いを得て間もないのに、一人でやっていけるでしょうか。主ご自身か教会による信仰の交わりが必要なことを、彼は分かっていました。「イエスはどんな人も、一人で証しをするように放っておかれることはない。村八分にされるなら、それはイエスの御側にもっと近づけてくれる」(ﾊﾞｰｸﾚｰ)決して一人にしない主、羊を追われる主。私たちは他人に迷惑をかけるから、教会の厄介者だから、折しもコロナ禍だし自宅礼拝しようなどと考えます。そうして変に大人になって自分に規制をかけると、風通しの悪い自分本位の硬直化した信仰と化します。けれども私たちが難しい状況にあればあるほど、主は深い部分に、誰も入らぬ暗い部屋に入り、優しく関わろうとしています。

追い出され、見つけ出される。思い起こすのはハガルではないでしょうか。彼女は正妻サラと戦うどころか、圧倒的に弱く何の反論も出来ない立場です。「しかし、あの女奴隷の子も、わたしは一つの国民とする」(創 21:13)ここには、追われた者、不利な立場の者、取るに足りない者を配慮される愛があります。見つけ出し声をかけられ養われると知り、存在が認められていると確信する。盲人の場合はハガルよりも、もっと直接的に明確に信じたいと願いました。「主よ。私が信じることができるように教えてください」謙虚に準備を整えて、パリサイ人の相手を見下す傲慢とは大違いで(34 節)、霊性の違いと言えます。彼の開かれた霊性は名前と顔の一致を告げられた瞬間に、信仰告白と礼拝に、結実します。ここで教えられるのは愛と真理の相関関係ではないでしょうか。いやしと救いで愛を体験しながら、御利益で終わらずに真理を求める契機となります。37 節の御言葉は単なる事実に留まらず、弟子への招きも含みます。パリサイ人は自己完結した暗い霊性ですが、キリスト者は開かれた霊性から、開かれた愛と真理の循環で主を知り、日々目を開かれ続けていく人種です。

7 月 11 日

「門から入る者」

ヨハネ 10:1-6

武安　宏樹　牧師

門といえば岡崎城＆名古屋城 etc.城門や、漱石「門」＆芥川「羅生門」etc.を、想起します。遊郭の大門や神社の鳥居など、内外の世界を隔てるのが役割で、それは聖書でも同じです。エルサレムには泉の門＆羊の門など多くがあり、来るべき聖なる都には東西南北３つずつ計 12 の門、その他に詩的表現として、死の門＆義の門＆ハデスの門＆望みの門＆いのちに至る門 etc.登場します。逃げ出した弟子たちは破門覚悟でしたが、中世の戒規にも多く見られます。「わたしは門」(９節)は「わたしは道であり、真理であり、いのち」(14:6)と同義つまり一本道に唯一の門が置かれて、そこを通らないと不法侵入になります。忍び寄って横入りし羊を惑わす者こそ、パリサイ人の衣を纏った悪魔であり、十字架での頂上決戦に際し、あらゆる方面からこの門を消そうと躍起になり、宗教者＆政治家＆群衆、そして弟子の門をくぐったはずのユダを完全攻略し、他の弟子たちまでキリストの門は彼らに不相応だから、破門相当と遠ざけて、門番の主イエスには全ての羊が連れ去られ、誰も味方する者はいないと囁き、追い出したと万歳します。主はこの痛みを知るからこそ盲人を捜したのです。

門番の声に従って囲いの中に入ったのが盲人でしたが、正体は狼なのに、羊飼いを装い少しでも反抗したら、エサをやらず育児放棄して追い出すのが、パリサイ人でした。けれども世から見捨てられた者も、重い障害を負っても、門番＆牧者の声を聞き分けることが出来る。牧者と羊の間にことばが存在し、信頼に足る方と信じて受け入れることで、この方について行けばよいという、信頼関係が生まれます。理解の鈍い羊に愛をもって懇切丁寧に忍耐強く教え、エサだけでなく喜んで世話をする。「それぞれ名を呼んで」個別の愛の表れでさらに主の牧者の視点は、性格＆生い立ちと併せて賜物までも見極めます。そして慣れ親しんだ地で居ることで良しとせず、新しい地へ「連れ出します」。かの地には多くの戦いや獣があるでしょう。まさに荒野のモーセの心境です。「外に出す」は「追い出す」(9:35)と同じ語で、パリサイ人への痛烈な皮肉です。両者を比較すると詩 23 篇で「緑の牧場」に導かれる牧者が何故「死の陰の谷」を通らせるのか、そこに試練の道を通して恵みを体験させる愛ゆえと判ります。単にくぐるだけでなく似姿に変えられる門は、厳かな思いと献身を求めます。

7 月 18 日

「良い牧者の条件」

ヨハネ 10:7-13

武安　宏樹　牧師

本年の聖句ですが、牧者なる主イエスとはどのような方なのでしょうか。万人祭司を掲げるプロテスタントでは、信徒全員が牧者であると言えます。真の牧者に養われる羊だからこそ、牧者像を証しすることが伝道となります。

一つ目に主イエスが門であり良い牧者との確信です。御子と父との結合や、パウロ曰く私たちがキリストの内に、キリストが私たちの内におられると、たとえ罪を犯しても追い出されることの無い関係が、確信の基盤となります。ここに二つの意味が含まれます。まず私が立派な牧者になろうとする以前に、主イエスが先立ってくださることです。その確信から肉の力が後退します。謙遜さと共に御霊の実「愛・喜び・平安・寛容・・・」(ｶﾞﾗ 5:22-23)が結ばれます。やるべきことをやって後は主に委ねることで、人間的灰汁(アク)＆打算が抜けます。当時の羊飼いは夜は門で寝て 24 時間世話しましたが、私たちはそうはいかず、主ご自身が 24 時間守ってくださると期待して祈り、羊に関われば良いのです。もう一つは主が徹底的に責任を取ってくださることです。羊は太古の昔から、救いに選ばれており、聖霊の働きで誰に聴くべきか分別も備えられています。導かれた羊だから途中で投げ出さずに、関わり続ける力が与えられています。

二つ目に主イエスのように羊たちに、いのちと糧が豊かに与えられるよう、心を配ることです。囲いの中で管理するだけでなく、「出たり入ったりして、牧草を見つけ」栄養をつけながら、羊たちは主体的に信仰成長して喜びます。大事なのが羊たちのためにいのちを捨てる覚悟で、神特有の愛(アガペ)です。「同じようにしなさい」(ﾏﾀ 20:28)途方もない命令を主は私たちに命じますが、これは努力目標ではなく、「自分の師のように」(ﾙｶ 6:40)なれるということで、その代わり厄介事で逃げる「雇い人」の様でなく、責任もって関わることです。弟子たちは犠牲的な愛を受けてきたから、人に対しても出来るようになった。主イエスを模範だけでなく聖霊の後押しがあります。御霊は奉仕を導きます。隣人を愛し、嫌いな人と和解し、難しい人を理解し、悪魔の攻撃に身を挺す。導かれた羊に誠心誠意仕えれば、その人も同じように導かれた人に行います。教会の外の散らされた羊に福音を届けるのは、牧者を知る私たちの務めです。

7 月 25 日

「知り合う関係」

ヨハネ 10:14-15

武安　宏樹　牧師

一つ目に主イエスが私を知っていることを、パウロが語ります(ｴﾍﾟ 1:4-5)。「わたしのもの」神に所有権があるとは、救いのために予定されて時至って、救われたということです。試練に苦しむこともありますが、愛と選びの故に、地上でキリストの光を放つべく選ばれた逸材ということで、罪や失敗さえも、心に留めてくださって、それすらも神の栄光のため輝かそうとされています。密かな罪も知られたくない過去も、見られていると恐怖を感じるものですが、評価されるべきことだけでなく、価値の無いこと汚いことも光が当たります。原語「選び」は能動＆受動の間の中態で、「神が自分のために選ぶ」意味です。選ばれて起用されて終わりではなく、常に御心や能力や愛情が注がれている。神が自分を深く知ることに導かれ、聖霊の連動から自分も神を知り始めます。

二つ目に私が主イエスを知ることは、主イエスが私を知る門を通らないと、知識だけ体験だけという歪んだ知り方に陥ります。神が私たちを知っていて、そこから自分の罪とキリストの橋渡しを知ると、知識と体験がリンクします。若い時のの粗削りな信仰から、選ばれた者として引き寄せられる経験をする。その繰り返しで求め方が変わります。山上の説教のハイレベルな行いに倣い、出来ない自分を受け入れ、思いもよらぬ方向から成し遂げられる恵みを見る。「ちょうど父がわたしを～わたしが父を～」とは、父と御子が同じ食卓に座す、顔と顔を合わせる水平の関係と共に、地上で人として人と共に生きる垂直な関係を併せ持っています。この二つと父＆御子＆聖霊の三位一体が取り囲む、キリスト信仰とは立体的で、血潮の通うダイナミズムに満ちているものです。

三つ目に前二つの結果、「羊たちのために自分のいのちを捨て」るのです。主イエスがいのちを捨てられた以上、「わたしのもの」も同じようになると、語られてはいないでしょうか。「いのちを得るため、豊かに得るため」(11 節)他方で「一粒の麦、地に落ちて死なずば」(12:24)弟子たちに厳粛に語ります。このことは各人にどのような献身が求められているか、黙想すべきことです。それは遠くにあるようで意外と近くにあります。大事なものを手放していく。知るだけでは重くなるも、主が御冠を脱いで軽くされたことに倣いましょう。

8 月 1 日

「ほかの羊たちも」

ヨハネ 10:16

武安　宏樹　牧師

「羊たち＝信者」は自明ですが、人種や時間の範囲について考える人々は、いなかったでしょう。パリサイ人や弟子たちも、ユダヤ人を大前提として、さらに律法の落ち度が無い者が囲いの中にいると、漠然と考えていました。非常に狭く鉄条網や有刺鉄線を張り巡らした、閉鎖的な囲いのイメージです。にもかかわらず、パリサイ人と取税人の祈りのたとえを聞いてみると(ﾙｶ 18:)己の正当性を声高に主張する裏返しで、救いの確信の希薄で哀れな訴えです。柵の内＆外で綱引きをして、結果的には外側の取税人に軍配が上がりますが、この柵は可動式で、外の罪人＆異邦人＆障碍者に開かれようとしていました。一方で主イエスはカナン人の女に、扉を閉ざしているように語られましたが、本格的解放の前段階として「小犬でも～」の一途さに主が折れました(ﾏﾀ 15:)。彼女が称賛されたのは信仰です。旧約時代は柵を固定しユダヤ人をまず養い、その延長線上で主イエスも筋を通して、彼らよりも異邦人を後に回しますが、アブラハムに代表されるように、信仰によって義とされるのが神の道ゆえに、人種も貴賤も問わず神に近づく者全てに、憐れみによって扉は開かれます。

カナン人の女は、アンテオケで異邦人伝道の扉が開く前の先発隊でしたが、柵に体当りする勇敢な信仰に学ばされます。神学の研鑽は大事なことですが、全知全能の神への線引きゆえ、学びすぎると聖霊の働きを阻害しかねません。「それらも、わたしは導かなければなりません」は、神の救いの御計画として、主イエスがユダヤ人の彼方に異邦人までも、既に視野に入っていた証拠です。「聞き従い」「なる」は、「たたく者には開かれます」(ﾏﾀ 7:8)同様に未来時制で、未だ閉ざされている如く見える宣教の扉も、たたき続ければやがて開かれると、語っておられるのです。その瞬間は内側の者には相当の違和感を抱きますが、聖霊は百人隊長コルネリオとの邂逅で、ペテロの幻を解明します(使 10-11:)。これ以降初代教会は全面的に地の果て宣教に、割礼問題も克服し邁進します。私たちは自分の目に救われそうな人や、社会的に好ましい人が導かれたらと、願う者ですが、聖霊がどのような人々にも福音を伝え囲いの中に迎えようと、されることを忘れてはなりません。開放的な群れとなるよう祈り続けつつ、私たちがへりくだって心を広げられることから、異邦人伝道は始まるのです。

8月8日

「いのちを得るために」

ヨハネ 10:17-18

武安　宏樹　牧師

本日の箇所で三度も語られている語が「捨てる」で、本書でペテロ(13:37)、主イエス(15:13)、手紙でも(Ⅰヨハ 3:16)、著者ヨハネは幾度も用いています。たとえばゴミを捨てるというと、自分の手を離れて焼却処分が予定されます。それでは主イエスも同様にいのちが邪魔だから、ポイ捨てしたとするならば、私たちも永遠のいのちを粗末にしたり、人生をゴミ同然と軽視するでしょう。けれどもその意味は、脚注に「与える」とも訳せるとあるように少し違います。「捨てる」と「与える」がどう結びつくのか？　実は原語の意味はいろいろあり、「置く」「横たえる」「定める」といった意味から、'lay down'(NIV)が穏当です。よって総合すると、自分の所有や思いを離れて他の人に与えたり植えたり、つまり燃やされて失われるのではなく、だれかに手放す意味が見えてきます。

大事なことは主イエスが、「捨てる」「得る」をセットに語っておられること。いのちを捨てるというよりも、「投げる」「委ねる」というイメージがあります。思い返せば、私たちの人生は母の胎から生まれ、抱かれて乳を与えられつつ、何一つ自分の力で勝ち取ったものはありませんが、成長して自立をすると、日々の衣食住に忙殺されて、神から与えられている実感が乏しくなります。そのような生活の心配をすること自体悪くありませんが、明日のことまでも気に病むのは異邦人の生き方であって、「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば～」(マタ 6:33)神を求める副産物で生活もついて来ると語られます。その中には自分のいのちも含まれ、以上全てを横に置くことが献身なのです。大事なものを捨て愛する人と別れる、心痛む時にこそ神の国が見えて来ます。

もう一つ主が強調されていることは、「自分から」いのちを捨てることです。主イエスは父から無理矢理とか人為的に、あるいは偶然死なれたのではなく、道を引き返すことも十字架上でさえ命乞いも可能でしたが、そうしなかった。自分の意志で父の御心を選び取って、裸で神の手の中にいのちを委ねました。父が栄光を現されて、何千倍にも増し加えてくださる確信があったからです。「一粒の麦、もし死なば、多くの果(み)を結ぶべし」(12:24-26 文語)献身を表明して「得る」以前に「捨てる」ことを求めれば、貪り尽くせない恵みが追って来ます。

8 月 15 日

「悪霊の限界」

ヨハネ 10:19-21

武安　宏樹　牧師

前章の盲人のいやしが悪霊の業か否か、ユダヤ人の間で分裂が生じました。果して悪霊は何者でどこから来たか、今も実在するのか、何をしているのか、私たちはどう対処すべきでしょうか。神学書では天使論の中に位置しますが、そもそも神が悪霊を造られたのではなく、良い天使たちの中で堕落を選んで、サタンの配下として御使いと対決しながら、神の摂理の妨害に精を出しつつ、結局は神の許容範囲内で泳がされているだけで、終わりの日に諸共滅びます。学者間では非神話化論(ﾌﾞﾙﾄﾏﾝ)や社会構造の歪み(ﾃｨﾘｯﾋ)など理屈に留まり、他方では第三世界における宣教現場での、異教的習慣との対決の必要性から、悪霊の現象に対する関心の高まりを見せていますが、霊的戦いを推進した末、分裂した教会も存在し繊細さも求められます。エリクソンは以下で語ります。「悪い天使について知ることで、悪魔的な諸力から来ることが予想できる誘惑の危険さと巧妙さについて我々は警告を受け、悪魔の働き方について洞察を得る。両極端を警戒する必要がある。危険を無視しないために、悪魔について軽すぎる取扱いをすべきではない。一方で、過度の関心を持つべきでない。」

無視せず過敏にならず、神の恵みの視点からバランスを取ることで正しく戦えます。パウロが冒頭「大能の力によって強められなさい」(ｴﾍﾟ 6:10-12)と、救いの確信(1-3:)＆ふさわしい歩み(4-5:)、聖霊に満たされた関係性(5-6:)以上を前提に神とのタテの関係から、隣人とのヨコの関係も正されて初めて、悪霊と戦うことができると語ります。これは律法主義や神学など文字でなく、霊性が問われます。そう言われると私も含めて尻込みしてしまいそうですが、ただ悔い改めと赦しの確信に立てば、狭い視野が拡がり、高慢が打ち砕かれ、強められたことになります。「私たちの格闘は血肉に対するものではなく～」原語は接続詞「なぜなら」が入ります。私たちの敵は可視的な人や組織でなく、背後で世の神として働く悪魔で、その活動目的は「歪み」をもたらすことです。滅亡が確定しながら未だ泳がされているのは、私たちが然るべき戦いを経て、神の栄光を現すための「宿題」ではないでしょうか。盲人の歪みからの解放に、少なからぬユダヤ人が違和感を覚えながら、新しい人生の模範となりました。終末に至るまで悪霊追放の分だけ神の国が拡がる、喜びを共にしましょう。

8 月 22 日

「福音宣教と届く言葉」

ルカ 24:13-35

杉山　義也　師

夕方、二人の弟子が日の落ちる方に向かって歩いている。絵になるような情景です。この箇所を読んでみると何か不思議な感じがしてきます。そしてこんな疑問が浮かんできます。

「なぜ彼らは暗い顔をして、イエスさまが復活された日の夕方に、エルサレムから離れて行ったのか？」
「なぜイエスさまは、彼らに最初から正体を明かされなかったのか？」
「なぜ、突然食事の席で姿が見えなくなられたのか？」

この二人の弟子は、目が遮られていました。イエスさまが近づいて来ても、それが話題の中心となっているイエスさまとは気づかなかったとあります。そして彼らは、復活のあったエルサレムとは逆方向に歩いています。

考えてみますと、私たちの知り合いの中にもいるのではないでしょうか？そうやって暗い顔をして、イエスさまの復活が証されている教会とは真逆の方向に歩き出そうとしている人。もう歩いている人。そして、残念なことに、未来がある、希望を持ってもいいような若い世代の人でも、暗い顔をして歩いていることがある。歩いているならまだしも、お家に引きこもっている人もいたりする。そして、そんな彼らは、盲目といいますか、周りが見えていなくて、行く道が定まっていない世代です。もしかしたら皆様自身にも経験があるかも知れませんし、家族や親しい仲の人にそのような方がいたりして、何と声をかけたらよいか分からなかったりする。

この時のイエスさまのさりげない接し方を、いっしょに見ていきたいと思います。イエスさまの接し方はものすごくシンプルでした。「一緒に歩いて、一緒に過ごして、一緒に食べた」わけです。

8 月 29 日

「だれも奪えない救い」

ヨハネ 10:22-30

武安　宏樹　牧師

「だれも彼らをわたしの手から奪い去りはしません」(28 節)「だれも彼らを、父の手から奪い去ることはできません」(29 節)救いの根拠に多用されますが、「だれも」は何を指すかと言えば、先に答を言うと罪と死と敵の力を指します。一つ目に罪を犯すと、十戒「殺し＆盗み＆姦淫＆偽り」まで行っていなくても、誰でも心の中で人を呪ったり、淫らなことを思ったり、不都合を隠蔽したり、身に覚えがあるでしょう。すると神との関係が歪んで自分にも傷がつきます。回復に悔改めが必要ですが、取引目的で行うとサウルと化します(Ｉｻﾑ 15:)。二つ目「罪の報酬は死」(ﾛﾏ 6:23)神との関係が分断されると恵みが届かない。実際は断たれたのでも届かないのでもなく(ｲｻﾞ 59:1-2)、罪を告白するなら、主イエスが弁護者となって回復が導かれます。死には三つの意味があります。肉体の死＆霊的な死＆永遠の死。キリスト者は永遠の死から解放されており、永遠の視点から前二者を見ることが出来ます。三つ目は敵による攻撃ですが、見えない敵サタンや、見える敵と思しき勢力もあります。サタンの攻撃は、最も近しい関係の分断を狙います。罪に苦しみ、奉仕に疲れ、隣人を疑う。多忙も敵と言えるかも知れません。そんな時は「お手上げ」状態ということで、地上での手を離して天に向かい手を挙げて、賛美すると事態が動いてきます。

ユダヤ人たちが御名を冒瀆といきり立った「わたしと父とは一つ」(30 節)は御父＆御子のお考えと目的が一つに結ばれている意味で、ゲツセマネを前に、「わたしたちと同じように、彼らが一つになるためです」(17:11)と主は祈られ御父＆御子の密接な関係同様、主と私たち、私たち相互に一つになることを、求めます。すでに三位一体の輪の中に入れられた私たちは本質的に一つです。地上で私たちは「一つ」を旗印にして、初めて罪＆死＆敵の力と戦えるのです。原語「奪い去る」には「引き上げる」意もあり、黙示録 12 章は後の教会への迫害、Ｉテサロニケ 4 章は空中再臨について語られます。主イエスが来られる時に、だれも主との関係を引き裂けない代わりに、私たちは天へ拉致されるのです。その時に既に召された聖徒も地上の信徒も、時間＆空間を破って主と一つに、かの至福の瞬間を迎えます。「だれも奪い去ることができません」その心は、「わたしがあなたがたを奪い去る」ゆえに、今日も明日も永遠に一つなのです。

9 月 5 日

「父の中に、わたしの中に」

ヨハネ 10:31-42

武安　宏樹　牧師

本章のキーワード＝位置関係。「わたしと父とは一つ」(30 節)の御言葉には、父＆御子の一体性だけでなく、牧者＆羊たちの三位一体的一体性も含みます。羊たちは信者のことですが、そもそも旧約時代から牧者の最も近くで愛され、敬愛する族長アブラハム＆預言者モーセ＆王ダビデも、救い主を示したのに、ユダヤ人たちは神の都の真中で偽りの霊に与し、執拗に神の招きを拒みます。 それは捕囚の傷か暴君に徹底抗戦してきたプライドが、自分を神とするのか。 どうしても御言葉を拒むなら御業をと、「信仰＝知識＋体験」と主は説きます。そのために「父がわたしに、わたしも父に～Father in me, I in Father 」の、確信が必要で、理屈では一方が他方の内に、他方が一方の内に両立するのは、不可能ですが、キリストが全き神の子＆人の子たる「二性一人格」を信じると、血液の循環のように互いに交流する聖霊体験が、私たちの内に起こるのです。２つの「in」両立が、私たちの信仰＆霊性に健全＆充実＆バランスを保ちます。聖霊の内住や聖霊のバプテスマは、一方通行的な個人的体験を強調しますが、「in」の両側通行の恵みから、「one」のキリストと共なる一体性へ昇華します。

この恵みについては、パウロがエペソ書＆コロサイ書で詳述しています。「私たち二つのものを一つにし、新しい一人の人に造り上げて」(ｴﾍﾟ 2:14-16)彼らと同じパリサイ人として在世中の邂逅は適わず、聖霊体験のみながらも、この敵意が律法から来ることを、自分の肉との葛藤から体験的に知りました。内なる罪に引き裂かれた人格が十字架で磔殺され、キリストの血液が流され、聖霊の息吹に鼓舞されて御体の一部とされます。内住の確信は不可欠ですが、それだけでは駄目で、主の御手と摂理の内に生かされる逆の視点が必要です。「Jesus in me」だけでなく「I in Jesus」。自分の内なる御声や愛だけでなく、自分が置かれた家族や組織や教会で、主が私を通して何を願っているのかを、求めることで視野が開かれます。恵みの相互性を体験して信仰は成長します。ここまで神の子たることを証し続けた主イエスは、40 節～公生涯の出発点へ、退いて充電する姿からも、「わたしが父の内に」在ることを大事にしています。そこでは何も奉仕されなかったと思われますが、多くの決心者が生まれます。進むこと退くことの両面も、私たちが「in」の二重性を捉えると祝福されます。

9 月 12 日

「乾いた地で」

詩編 63:1-11

武安　宏樹　牧師

短篇ながら密度が高く絵画的なため、「詩篇全篇の精神と霊魂が凝縮されている」(ｸﾘｭｿｽﾄﾓｽ)広く愛されている詩篇です。新改訳は第一部を１～３節とし、荒野や砂漠の如き状況でも聖所となるという霊性の事柄にまとめます。「あなたに渇き、あなたをあえぎ求めます」ダビデの神への一心なる渇望です。脱水症状を経れば命の危険を感じるでしょうが、水の入手が容易なわが国は、「ああ美味しい！」と感動するような代物ではありません。コーラやコーヒー、アルコールの方が口にする満足感は得られるでしょうが、飲み食いせずとも、生死に関係の無い以上の嗜好品とは、水は必要性の次元が根本的に違います。水分が不足すると、熱中症＆脳梗塞＆心筋梗塞等健康障害の要因となるため、厚生労働省ホームページ「健康のために水を飲もう推進運動」が謳われます。水を飲んで汗をかいて尿が出て老廃物を排出。水は体の依って立つ基盤です。したがってダビデの神に対する求め方は、私たちの楽しむ嗜好品の類でなく、生死の崖っ淵での根源的欲求です。息子に追われるような不始末も大罪でも、そこで御名を呼び求めれば聖所となる。彼はまず神を呼ぶことから始めます。

「神よ、あなたは私の神」飢え渇くより聖所宣言より先に、契約関係に立ち、これまで大巨人に勝利し、サウルに追われ、不思議な奇跡を見て、継続的に積み重ねてきた神との信頼関係が、いかに砂漠の状況をも聖所へと変えます。不毛な状況と嘆く前に、どれほど早く神を一心に求める聖所に変えられるか。そのような経験を数多く通ることで、不毛どころか水の流れる地と知ります。水は恵みを指しています。「水のない」⇒「恵みのない」と置き変えてみると、そこに恵みがあるかどうかは、私たちが恵みに生きる民か関わると知ります。第二部は恵みを受けている民の実態で、砂漠を聖所に変えるのも立派ですが、常日頃「生きるかぎりほめたたえ、両手を上げて祈り」満足と喜びがあります。神は生きる最低限の水だけでなく、「脂肪と髄」で喜びを与えてくださいます。本篇で繰り返される賛美の中で、食卓のように心躍る恵みが尽きないことを、思い起こしていただきたい。私たちの恵みもいつも生死をさまよう訳でなく、いつも御馳走ばかりでもありませんが、その時々の恵みに感謝し賛美します。そして第三部は魂の敵に勝利する凱歌が、王なる私たちの証しとなるのです。

9 月 19 日

「老いてなお賛美」

詩篇 71:16-24

武安　宏樹　牧師

当教会は何と 70 歳以上が半数近くを占める、超高齢化教会となりました。教会の基本は揺り籠から墓場まで、年が若いからと軽く見てはいけませんし、定年のある役員会を除けば、後期高齢者になったから引退などもありません。高齢者が多くなれば心身の健康や車の運転など、それなりの配慮が必要です。キリスト教界の通念で教会に高齢者が多いと、牧会的経済的に負担が多いと、よく言われますが、この考えは数字や世の常識に囚われているのではないか。実際問題として多くの教会で上記の課題から、苦闘しているのも事実ですが、聖書では高齢者に否定的な記述がないだけでなく、公平な勧めがなされます。ヨブの三友人の長老格を指して「年長者が知恵深いわけではない」(ﾖﾌﾞ 32:9)エリフが皮肉を言う一方「若い人たちよ。長老たちに従いなさい」(Ⅰﾍﾟﾃ 5:5)「年配の男の人を叱ってはいけません」(Ⅰﾃﾓ 5:1/ﾃﾄ 5:2-5)使徒は尊敬を求め、逆に言えば次世代の模範となるべく、相応の信仰的言動も求められています。老モーセは死に際に山に登らされ、澄んだ目で彼方を遠望させられ(申 34:)、老ヨシュアは「占領すべき地がたくさん残っている」(ﾖｼ 13:)と激励されます。

つまり高齢信徒の霊性が教会の霊性を左右します。試練や苦しみや葛藤、だからこそ受けた神の愛＆恵み＆赦しの場数は、若者よりも多いはずです。そういった経験を重ねて砕かれ器が広げられたか、逆に意固地になったか。神と人に忠実な高齢者が恵みのうちに歩むことを、下の世代は期待します。コロナ禍にあって従前は当り前に行われていた、礼拝や祈祷会での交わりが、三密や飛沫感染のリスク回避の名目で削減され、諸教会が弱ってきています。当教会が礼拝＆祈祷会＆教会学校を継続することも、驚きの目で見られます。なぜ継続できたのか。それは高齢信徒が礼拝と祈祷会に熱心だったからです。本篇は題が無いですが、カルヴァンは老ダビデがアブシャロムから逃亡中と、白髪頭で惨めにも追われる状況と推定します。周囲から冷たい視線を受け、絶体絶命のピンチに際しても、彼のうちには神への熱情がたぎっていました。老いぼれて笑われようが、礼拝＆賛美＆伝道に邁進する振り切れた信仰です。そこには自粛など微塵も感じられず、執拗に神を追い求める姿があります。「毒を飲んでも決して害を受けず」(ﾏｺ 16:18)この時代に高齢信徒が必要です。

9 月 26 日

「病気の理由」

ヨハネ 11:1-5

武安　宏樹　牧師

本章はラザロのよみがえりです。とは言っても主イエスの二度と死なない永遠のいのちへの復活のことではなく、死ぬ肉体に蘇生したということです。本書７つの奇蹟中７番目、この最大の奇蹟を通して指導者たちは一刻も早い、殺害を決意します。マルタ＆マリヤ姉妹は給仕か祈りかで有名ですが(ﾙｶ 10:)弟ラザロの記述は本書だけです。この家庭は主イエス上京の際の定宿であり、最も懇意にしている支援者なので、当然主は飛んで来てくれるだろうという、確信が前提となり、差し出がましさの感じられない３節の言葉が出てきます。 私たちも主が病をいやしてくださるように祈り、周囲に祈りの要請もします。命に関わる場合に限らず長年の病や精神的不調も含めて、いろいろ祈ります。一見して御心から逸脱と思われることも、聖霊の導きと矯正に期待して祈り、その答えについては受け止め方は様々ですが、答えが来ると平安が来ます。絶えず祈ることは喜びと感謝に挟まれて、御霊の循環があります(Ｉﾃｻ 5:17)。この姉妹も同様で、弟が病気という単なる事務連絡でなく期待がありました。

けれども祈れどすぐに答えられず、なかなかいやされないこともあります。生まれつきの盲人がそうでした(9:)。「だれが罪を犯した？」覚えもないのに、ヨブの三友人のように非情な因果方法論で苦しめ、反対に答えられたならば、本人の信仰故とか周囲の祈りとか根拠づけようとする。三友人が寄り添って、１週間で神との邂逅がなされたら、ヨブ記は全く違った話になるはずですが、そうでなく人間がこよなく愛し、他宗教が依拠する因果応報への革命的な、死亡宣告がヨブ記の意義です。そこから解放されることが真の霊的成長です。 マルタ＆マリヤ姉妹の求め方は間違っていませんが、一日千秋の思いで祈り、到着待ちわびる思いも空しく弟は死んでしまう。姉妹にはあまりに酷でした。しかし主は「この病は死に至らず、神の栄光のため」(文語)と使いに答えます。もちろん真意は理解不能で、信仰深いとはいえ人間的理解の範疇を出ません。主が言われたのは地上ではなく、その先の永遠の世界で神が栄光を現される、異次元の恵みを、主御自身が死に向かう露払いとしてラザロを指名しながら、生前の因果応報だけでなく死で無に帰す絶望の打破を、主はなさるのです。私たちも同様の痛みを通りつつ、人の不足に神の栄光を覚えて目が開けます。

10 月 3 日

「眠りから覚める時」

ヨハネ 11:6-16

武安　宏樹　牧師

ラザロのよみがえり第２回、眠りの意味について見ていきたいと思います。彼の危篤の報を受けた主イエスは、なお２日滞留という「らしくない」行動後、いざ往かんとするも、危険なユダヤ地方を案じた弟子たちは消極的でした。トマスときたら、ラザロが死に主が死なれるなら自分らも死のうと絶望的で、彼らは死の彼方については何も見出していませんでした。ここで主イエスは、「死にました」と結論から言わず、「眠ってしまいました」たとえで表現しつつ、その背後に隠された霊的意味について、敢えて睡眠とも死とも取れる語から、想像力を喚起します。旧約に眠りが死を意味する表現はいくつもありますし、会堂司の娘のいやしでも「死んだのではなく、眠っているのです」(ﾏﾀ 9:24)と、両語を藪から棒でなく、聖書と御自身の言葉から結びつけようとしましたが、失念していたかラザロの死の衝撃で飛んだからか、理解に至りませんでした。

主イエスが「眠り」と表現した死後の世界とは、どのようなものでしょうか。聖書はエノクやエリヤを別にして、肉体の死について避けられないとします。けれども人間には肉体だけでなく霊魂があり、肉体は死ねど霊魂は生きます。肉体の死(＝第一の死)後、霊魂は終末の復活を待つ中間状態に入りますが、キリスト者はハデスでなく、そのまま主と共なるパラダイス直行となります。マルタは死者の復活を信じるも、中間状態の断絶が続くと考えていました。弟子たちも同様で、死ねばお別れ、葬式＆火葬で骨だけと空しく考えていた。しかし主イエスは「死んでも生きる」(25 節)と、人は死で終わるものではない、死と生の連続を語ります。「それゆえ彼らは死にはするが、それは神の愛から出るのであって、罪と悲惨から彼らを全く自由にするため、また栄光におけるさらに深いキリストとの交わりを可能にするためであり、彼らは死に際して、それに入るのである」(ｳｪｽﾄﾐﾝｽﾀｰ大教理問答 85)斯くして死は通過点なのだと本気でラザロを起こしに赴きます。いやしも素晴しい恵みに相違ありません。されど死者のよみがえりは死への恐れと絶望を、完成と愛と希望に変えます。「あなたがたが信じるために」自身に留まらず、彼らが死を恐れない伝道者に。ステパノのように迫害者を忘れ、天の神の右の座のイエスと御使いを注視し、「一粒の麦もし死なば多くの果(み)を結ぶべし」彼方に祝福が用意されています。

10 月 10 日

「復活信仰」

ヨハネ 11:17-27

武安　宏樹　牧師

「我は復活(よみがえり)なり、生命(いのち)なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。」(25 節文語訳)この御言葉にどれほど多くの人が救われてきたか。されど冒頭からではなく、主とマルタとの会話で持てる知識＆感情を出しつつ、理解に近づいたのです。葬儀の多忙で悲しみを処理する暇もなく、遅ればせながら主が到着した途端、「主よ、もしここにいてくださったなら～」マグマの如き感情をぶちまけます。これまでの不安感＆焦燥感＆絶望感に苛まれつつ、家族で戦ってきた苦しみ。肉体的現臨と自分の欲望が強い点はマイナスですが、そもそもは主の遅刻で、わざと彼女を辛い目に遭わせ喰ってかからせ、何と失礼な言葉を吐いたかと、我に返らされ弱さを知る。試練の海で藁をも掴まんともがき苦しむ結果です。彼女の信仰は不十分だが不在ではなく、理解不足だが方向は間違っていない。主イエスはそのまま「あなたの兄弟はよみがえります。」直球を投げ込みます。失礼だとか間違っているとか言わず、柔和な微笑を浮かべて「大丈夫ですよ！今は死んでいるけど必ずよみがえりますよ！」この返答はどう響いたことか。ユダヤ教伝来の教理の反復と覚え、「お言葉ですが～」と言い返します(24 節)。

強弁に過ぎないように見えて、言葉を絞り出す中で自分の理解と違う形で、復活信仰が芽生える不思議な体験をします。語られて既存の理解が拡げられ、悔い改めや感謝が生まれる。まことに主との交わりはコミュニケーションで、サマリアの女との会話同様(4:)、語りすぎず傾聴して言葉を引き出す問いで、本人の感情を言葉に出させていく、カウンセリングの技法を主は実践します。御言葉は叩きこむものでもありますが(申 6:6-9)、相手の置かれている状況、感情にどのように配慮するかは聖霊の導き次第です。ましてや死者の復活は、人知を事柄ゆえ、聴いて直ちに理解するのは難しいと主は判っていました。だから既存の教理を足場にしつつ、「わたしはよみがえりです。いのちです。」復活の根拠がご自分にあると明らかにした上で、「あなた＆わたし」関係から、終わりの日を待つことなく「今ここで」、復活の目撃者にと信仰を迫るのです。死の陰の谷を歩く者、病の恐怖に打ちひしがれている者、孤独に苛まれる者。そのような者に、主はたとえも婉曲も無く心開かれた瞬間に直接に語ります。本書で明確な信仰告白は彼女のみ(27 節)。姉の告白が弟の復活を導きました。

10 月 17 日

「新しい歩み」

ルカ 9:22-24

杉山　義也　師

スタートは「イエス様、あなたこそ今も生きて、私とともにいてくださる、神様の御子キリストです。あなたこそ私の救い主です。」という告白がスタートで、ゴールは「復活」です。そして、この「告白」というスタートをしてから、「復活」というところの間には人生という道があります。私たちは、やがてよみがえり、栄光の姿に変えられるという約束があるのですが、途中は、やっぱりいろいろ大変なことがあったり、困難があったり、つらいことがあったり、病気になったり、いろいろあります。しかし、それで終わるというわけではありません。

私たちは自分の人生の中で、いわれもない苦しみにあう時に、理由のわからなし辛さがある時に、神様を知らない普通の人はどう考えるか。それは、「自分が何か悪いことをしたからこうなったんじゃないか」と、因果律で考えてしまいます。でも、聖書の教えは違います。神様は、いつでも私達の明日を見てくださるお方です。過去ではなくて、明日です。だから、いろんな試練が来るときに、「あ、自分は今、本当に神様の道の真ん中を歩いているんだな。」と確信して歩む、これが僕たちの信仰の生き方です

10 月 24 日

「涙の理由」

ヨハネ 11:28-37

武安　宏樹　牧師

ラザロ葬儀２回目で妹マリア登場。復活について姉から聞かされておらず、葬られて１週間は制御不能なくらい泣くことが、故人への敬意と認められる、念仏や焼香に等しき死者の霊への供養で、創造主が蔑ろにされていました。主がお呼びと聞いてマリアは急行。「もしここにいてくださったなら～」と、悲嘆の感情をぶつけます。そこで主イエスはどのような感情で応じられたか。この異様な雰囲気に憤るのか。それとも場に合わせるように泣き崩れるのか。「霊に憤りを覚え」は天からの怒りを表する如き、地震で喩えると縦揺れなら、「心を騒がせて(＝心の動揺を感じ)」は、人の悲惨を憐れむ横揺れの様であり、その結果が当初の怒りに反して、涙を流して彼らに同情しました(ﾛﾏ 12:15)。

この複雑な憤りと悲しみの同居を、どのように解釈したらよいでしょうか。もし半分憤り半分憐れみを表すなら、人間同様の中途半端な表現となります。100%憤り 100%憐れまれたのは、姉に語られた御言葉を思い起こしてみると、主は死の力を打ち破るために、地上に来られたことが分かりますが(25 節)、死の力こそ悪魔に唆され人が堕落の道を選び取ったことの、刈り取りでした。爾来、世と罪と悪魔が三位一体となって人々を取り囲み、信仰者の彼女さえ、死の濁流に流されんとしていました。「死よ。お前の勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか」(Ⅰｺﾘ 15:55)神の子の聖なる怒りです。私たちは罪への憤りが弱くはないでしょうか。復活を隠蔽する感情は罪です。

他方で断罪のみ、人々が泣こうが傷つこうが説明も慰めもしない無責任も、人が自身で罪深い空気に抗せないことを知るゆえに、良しとしませんでした。堕落以降どれほどの民が惑わしの霊の虜になってきたか、悲しまれたのです。100%憤り 100%憐れむのは、100%神で 100%人であるキリストの品性ゆえで、聖霊が２つの感情を統合しながら、十字架での最終決戦に向かって行きます。私たちは人に過ぎず、自己中心的な怒りや悲しみの発露も少なくありません。けれどもキリスト者に働く聖霊は、整理しきれないように思える感情を整え、憤るべき時に憤り、悲しむべき時に悲しむように、解き放ってくださいます。単一の感情に流されることなく、主と同じ感情になるよう心を開きましょう。

10 月 31 日

「石を除けよ」

ヨハネ 11: 38-44

武安　宏樹　牧師

かりに本章が 37 節で終わるなら、主イエスは十字架刑を免れただけでなく、世に相当な影響を与えた人間味溢れる信仰者として、名も遺せたでしょう。けれども本章における遅刻もカウンセリングも、全てはラザロ復活のためで、遺族を慰めるだけで後にせず、与えられた使命を全うするため墓に来ました。「キリストが墓に行ったのはいわば戦いに臨む闘士としてであった」(ｶﾙｳﾞｧﾝ)人の思いを横に置いて、神の御心のために踏み出す。キリスト者の基本です。

「石を除(の)けよ」(39 節文語訳)主イエスは自力や御言葉で動かすのではなく、人々に命じて彼らが従うことで、自分たちの手で御業に参与させています。神の自作自演でなく共同体の信仰成長を促す、御言葉に仕える教会の型です。けれども神の業がなされる時には必ず、人間的見方で抵抗する勢力が現れて、「もう臭くなっています」と視線を地上に戻して、主を非常識と軽く見ます。御言葉を忘れていたのか、それとも目の前の光景と符合していなかったのか。ああでもないこうでもないと抵抗する、マルタの姿勢は私たちのようですが、それでも信仰の一歩を踏み出させるため、カウンセリングを厭わぬ主でした。

これによって復活のお膳立てが、御言葉と人の奉仕の共同作業でなされて、あとは御業を見るのみですが、主が叫ばれる前に何故か感謝を祈られました。これは自分の願いが聞かれて初めて感謝する者へ、感謝から始める模範です。「わたしの願い」(41 節)とは父の御心を成し遂げるだけでなく、時間を取って、「無知で迷っている人々に優しく接する」(ﾍﾌﾞ 5:2)祭司としての願いでした。それが死に狼狽する者たちに接して涙する、人の子としての姿に現れます。ちなみに石を「取り除ける」と、目を「上げて」は、同じ動詞が使われています。人々は地下と地上を、主は地上と天を、三層をつなぐ共同作業なのでした。

私たちも思い出したくない過去の罪や傷を、石で塞いでいないでしょうか。彼らも悔い改めて石を動かしたように、私たちも天を見上げ恵みを味わうと、地下深くヘドロの如き罪が、愛と赦しの光に当てられていく経験をします。信仰の未熟な者も神の御手に巻き込まれ、主と兄姉と共に神の栄光を見ます。

11 月 7 日

「損得勘定」

ヨハネ 11:45-57

武安　宏樹　牧師

ラザロの復活による反応は、信者と不信者とを二分する結果となりました。本日は不信者が告げ口した宗教指導者たちの、暗いやりとりについてですが、世的なサドカイ人から成る祭司階級も、ガチガチの律法主義のパリサイ人も、本来は復活理解で水と油の両者が、キリスト殺しの一点で利害が一致します。その利害の中には宗教的以外に、秩序が乱れたらローマからどう思われるか、自分たちの社会的特権を剥奪されかねないという、恐れが占めていました。そんな彼らの霊性を主イエスは盲目と断じます(9:41)。神も御業も見えずに、自分の感情と立場と損得に敏感で、脅威を感じれば攻撃する肉的な人間です。主イエスは彼らの生活権を奪うため来たのかと言えば、そうではありません。このように盲目で反抗的な罪人さえ救われてほしいと、いのちさえ投げ出し、自分の立場や利害を顧みず人間的に見れば愚かきわまりない、無私の愛です。だから本来なら罪人と彼らを愛してやまない主とは、結び合うのが自然です。実際に私たちキリスト者は信仰によって、利害を越えた平安を得ていますが、神を知ることで真の自分を知り、聖霊は賜物と実でいっそう神に近づけます。

されど雌伏の時代を耐え忍び、ようやく救い主と邂逅したユダヤ人たちは、誰が殺したのか判然としない暗殺ではなく、最高法院を召集して議論の末に、総督さえ首を傾げる嫌疑で、公衆の面前で最大限の屈辱を味わわせた末に、非人道的手段で御子を殺したのです。その契機となったのが大祭司カヤパの、ツルの一声です。偉い人が力説して、世はそれに対抗する気力も失くします。彼が言い放ったキーワードが「得策」「better」(NIV)です。早く始末した方が、万事が丸く収まる。民の罪を償ってとりなすべき大祭司自ら罪を踏み固めて、危ない橋でもみんなで渡れば怖くないとばかり、民全体を大罪に導きました。価値判断において聖書に照らし必ずしも、白黒判然とする事柄ばかりでなく、優先順位を振り勘案しつつベターな選択をすることも、少なくありませんが、いずれにせよ主イエスならどう判断するか、祈りによって見極めることです。カヤパの深刻さは「得策」が方法論に留まらず、人生哲学であったことです。皮肉にも流されたキリストの血は、ユダヤ人の歴史に苦難をもたらしました。私たちは動機を探られつつ、聖霊は損得によらない思考と決定を励まします。

11 月 14 日

「愛の浪費者」

ヨハネ 12:1-11

武安　宏樹　牧師

主イエスに香油を注ぐ記事は福音書全て登場しますが、少しずつ違います。本書が三福音書と異なるのは、神学的な動機付けが織り込まれつつ(20:31)、死に向かう主をどう見積もるか、マリアとユダの対照的反応に現れています。香油 300 デナリを注げば(ﾏｺ 14:5)、労働者の年収相当の高額な浪費となって、ユダの言い分の方が律法的に金額的にも常識的、マリアの方が非常識です。動のマルタと静のマリア。決して優劣はつけませんが、姉の給仕も手伝わず、御言葉に聴き入るマリアを評価しているのは(ﾙｶ 10:42)、客観的にも評価がされやすい、姉とのバランスを採って持ち上げたのではないかと思います。部屋に籠って聖書を読んで祈るばかりでは、信仰深いのは分かるけれどもと、小言を言われるでしょうが、そういった低評価をはね返すほどに主を最高の宝としたのが、一見柔弱なようで内に秘める信仰の芯が強いマリアでした。姉のような働きが出来ない分、霊的な部分で仕える確信と謙遜がありました。

人から見える奉仕や見えない奉仕で、神の評価と人の評価の違いを考えて、どうしても人から評価されやすい奉仕や賜物と、そうでないものがあります。神のため純粋に奉仕しているようで、人から評価されずへそを曲げることも。そういう葛藤と無縁の人はいません。実際にマルタは自分だけ働かされてと不満を抱き、マリアも動けない自分にコンプレックスがあったことでしょう。教会論的には主の肢体として、結び合い補い合えばよいのですが(Ｉｺﾘ 12:)、肉の性が邪魔してなかなか一致が難しい。主がマリアの奉仕を肯定したのは、彼女にこれしか出来ない礼拝だからです。下女として足を洗わせてほしいと、髪を解いて主との個人(男女)的関係の、雅歌の甘美な世界を表現したのです。人のために何も出来ない、姉の助けも出来ない、でもこんな私を引き上げる、主の愛へ応えたいと。愛する弟の死＆復活から主が御自身を重ね合わせたか、「そのままにさせておきなさい」(7 節)知らずに注いだ意味を説かれたのです。なみなみと香油を塗った瞬間に、家全体に葬りの栄光の香りが充満しました。しかしこの香りに我慢できない者が、会計奉仕に精を出しすぎたユダでした。どんなに主から慰められても、盗みでしか己を維持できない屈折した心です。私たちは誰の評価に立ち、神の愛を止めることなく香らせているでしょうか。

11 月 21 日

「主の完全な助けと守りの中を歩む人生」

詩篇 121:1-8

入川　達夫　師

大きな人生の試練の中で、主なる神を見上げる信仰をうたった本篇から、神の私たちへの信仰の励ましをいただこう。

私たちの信仰への励ましは、

①「私たちの助けは、天地の造り主なる神から来る」（１、２節）

②「主は、私たちの毎日を一瞬の途切れもな見守ってくださる」（３、４節）

③「主は、私たちの全生活を支え守ってくださる」（５、６節）

④「主は、私たちのたましいを永遠に守ってくださる」（７、８節）

勧め

私たちのそばにいつも共にいてくださる生ける主に、すべてのことを委ね、このお方に依り頼んで人生の旅路を歩んでゆこうではありませんか。

特に、今の困難で不安定な状況の中にある時代の中で、生ける主の助けと守りをいただ生きながら、日々主を仰ぎ見ながら進んでいこうではありませんか。

11 月 28 日

「王が来られる」

ヨハネ 12:12-19

武安　宏樹　牧師

前回の香油注ぎ同様に、全福音書で記されるエルサレム入城の記事ですが、本書はラザロの死と復活⇒葬りのための香油注ぎと、十字架への流れの中で、救国のヒーロー現ると、やんやの喝采を送る群衆の期待とのズレを描きます。ナポレオンは馬に乗りますが、主イエスは敢えて子ロバに乗って凱旋します。戦争を思わせる馬でなく平和を表現するロバで、御自身をアピールしました。己の力で敵に抗戦するのでなく、ロバもろとも敵の生贄になろうと突入する。殺されることが分かっていて歩みを進めるならば、自殺行為とも思えますが、ロバといえば、信仰の父アブラハムの子イサク奉献を想い起します(創 22:)。「これは型です」(ﾍﾌﾞ 11:19)とあるように、モリヤへの行程は十字架への道を示します。アブラハムが父なる神、イサクが主イエスに相当するでしょうが、「神がお告げになった場所へ」途中からロバと家来を置き、父子だけで向かう。イサクも死は意識していましたが、沈黙の中でかの地へ一歩一歩向かいます。神と対抗するのでなく同じ方向を目指すには、ロバの方が従順なのでしょう。果してポーズでなく本当に刃を振り上げ、御言葉通りに子を殺さんとします。

「彼は、比喩的に言えば、イサクを死者の中から取り戻したのです」(ﾍﾌﾞ 11:19)神には死から復活させる力があることを、方法は知らねど確信していました。この歩みは「神に向かって」だけでなく、「神と共に」手を引かれ歩を進めます。アブラハムが神を信頼しイサクもロバもついてきます。主イエスも同様です。一人きりでロバと入城ではなく、父なる神に手を引かれて山を登ったのです。片手を父なる神に引かれ、イサクと違い代わりの羊は用意されない死の炎へ。しかし死の彼方には父のもう片方の手が回され、復活の約束を見ていました。死の彼方にいのちがあり試練の先に祝福があると、信じるから平和なのです。「見ろ、何をしても無駄だ。」(共同訳)敵が地団駄踏むのは信仰の光を消せず、群衆たちも巻き込む引力への無力感です。そう考えるとエルサレム入城とは、華々しさや自分たちの祝福ではなく、御手に引かれて泥臭く着実な歩みです。未だ肉的な思いが残存していた弟子たちも、当時は分からず後で理解します。若い信仰者は周囲の喝采を糧にしますが、自分のいのちよりも神に導かれて、「主の山に備えあり」と信じる歩みは、ロバの如く鈍重でも平安に登頂します。

12 月 5 日

「一粒の麦」

ヨハネ 12:20-26

武安　宏樹　牧師

「一粒の麦～もし死なば､多くの果(み)を結ぶべし」(文語訳)有名な御言葉です。ここからキリスト論の他、旧約＆ユダヤ人⇒新約＆全世界へ拡大する宣教論、私たち信者が聖霊の働きによって日々献身していく、聖化論にまで及びます。「地に落ちて～実を結び」は種蒔きの喩えと同語が用いられています(ﾏｺ 4:8)。地に蒔かれても死んでいない種とは、道端＆岩地＆茨の中で根を張らず腐る、残念な種で、そのまま残存でなく死ぬか腐るしか選択肢が無いという種です。世界は果てしない戦争＆格差＆飢餓＆環境問題に加え、コロナ禍終焉程遠く、諸教会も教勢低下に苦しんでいます。農夫なる神は世界をどうご覧になるか。「神は､実に､そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。」(3:16) 私たちの目に不毛に映る世界も、ひとり子を地上に落とされたほどに愛され、本質的には福音宣教により芽を出すために、良い土壌とされているのです。私たちは種蒔く農夫がどのような方か思い起こすことです。原語「落ちる」は、「倒れる」(ﾏﾀ 17:15)「ひれ伏す」(ﾖﾊ 11:32)と同語で、土壌にめり込みながら、天と地をつないで伏し拝む、主イエスの礼拝姿勢を想起します(ﾏﾀ 26:36-46)。

罪の苦しみに満ちた世界を愛するゆえに、主はどれほど涙流し祈られたか。この種は飛ばされていく軽い種子ではなく､地中に基礎を築き植わる種です｡私たちにも主イエスと同じ祭司として、天地をとりなす種が蒔かれています。神に選ばれキリスト者として地に落ちた以上、死ぬことが本質的に自然です｡人間的な死だけでなく､キリストと共に砕かれる死も意味します(ｶﾞﾗ 2:19)。世界の惨状を己の痛みとして砕かれ祈らされる時に、土壌が揺れ動きます。「死ぬなら､実を結びます」は現在時制で継続的に豊かな実を結ぶとの意味で、農夫がもっと実を結ぶため手入れします(15:)。「失う」は破滅に晒す意です。神に与えられた一度きりの人生で、永遠のいのちで実を結ぶために救われて､されど茨のような関心事＆心配事に覆われて終わるなら､勿体ないことです。聖霊は人格的な実と奉仕の賜物を注いで、動的に働かれようとしています。死んで実を結んで、そして主が居られる所に来ること＆居ることが奉仕です。仕える者が「いる」は中態で、神の御手と人の主体性との合作を意味します。皆さんは何処に居ますか。何処に向かっていますか。誰に仕えていますか。

12 月 12 日

「光があるうちに①」

ヨハネ 12:27-33

武安　宏樹　牧師

三福音書でいえばゲツセマネの祈りの箇所です。一粒の麦の高尚さからは一転、主イエスは「今わが心さわぐ」(27 節文語)と弱々しい御言葉を発します。苦しみ葛藤しつつ父に従う模範を示します。「心」は「いのち」(25 節)と同語で、自分のいのちを愛するか憎むか存在基盤の葛藤が、全き神＆全き人としての、このうめきに凝縮されます。「騒いで」は受身形で沸き上がるぶつかり合いを、イメージします。「神の子も自らのうちに、鉄や石の無感覚を持ち合わせてはいなかったことを聞く時、私たちは彼に従う勇気を持つようになる」(ｶﾙｳﾞｧﾝ)主イエスが心騒いだのは、私たちが恐れてもつぶやいても抵抗してもよいと、人間的感情を出して結果的に御心に立てばよいと、神が御子を賜うほどに、私たちに寛容を示された故です。葛藤することは時間の浪費と思いがちです。けれども一時とはいえ、主も恐れに身を任せられたことを、適用するならば、私たちは律法的な束縛から解放され、良い意味で力の抜けた献身が可能です。そのように自分の弱さを受け入れると、他人を慰めて励ますことができます。

27 節で主イエスには珍しく独り言の如く、「わたし」を三回繰り返した末に、「父と、御名の栄光をあらわし給へ」と自分の思い悩みを後に天を見上げます。祈祷会で詩篇第三巻を学んでいますが、73 篇や 77 篇の中盤に折り返し地点で、それまでの苦難に沈む心から「聖所」(詩 73:17)というフィルターを通されて、ガラリと流れが代わり、後半部は勝利の確信と賛美へと昇華されていきます。「信仰者の一生は、厳しい現実と十字架の福音の光の下で見た世界の間を何回も往復し、'信仰のみ"恩寵のみ"福音のみ'を一層深く学びます」(鍋谷堯爾)詩篇は人の弱さを通してキリストの救いを証します。主イエスは神の子ゆえ、何回も往復はしませんが、敢えて私たちのために一時的ですが葛藤しながら、決然と父の栄光を現す道を踏み出しました。天の御声は人々には雑音にしか聞こえなかったのは、彼らが主イエスの人間的側面しか見なかったからです。我が物顔で支配してきた悪魔を追放するため、人の苦しみと死と神の栄光が、十字架で交差しようとしています。戦いは福音を全ての人に伝えるためです。「引き寄せ」(32 節)は、復活の主イエスに従って網を「引き上げ」と同じ語です。苦難に天を見上げる時、主は臨在に引き寄せ算定不能の祝福を備えています。

12 月 19 日

「光があるうちに②」

ヨハネ 12:34-43

武安　宏樹　牧師

① 光の創造

「神は仰せられた。『光、あれ。』すると光があった。」(創 1:3)明暗を分ける恒星として太陽があります。月や地球は自ら光を放つことは出来ないことで、エジプトのアモン＆ラーや日本の天照大御神など、信仰対象とされましたが、聖書は神が天と地を造られた後に、太陽を含む諸々の光を天からの御声から、造ったと語ります。被造物という点では、人間は光や自然と同列に来ますが、他に与えられない「神のかたち」を有し、統治権も委ねられた特別な存在です。神の存在自体と性質が栄光で、栄光の作品たる人間は光を放つべき立場です。作品として相応しくない歩みをしていたことを悔い改め、私たちの代わりに、罪の罰を受けられたキリストにつながると、誰でも光を受けられるのです

② 光の効果

主イエスはご自分を光にたとえ、信じずに背を向ける者は闇の中を歩いて自分の位置が分からない者と語ります。座標軸も目的地も敵の存在も見えず、そんな状態で歩いて楽しい人はいません。イザヤは内面も同様だと語ります。私たちが歩くことが出来るのは、光が見えているだけでなく信用するからで、光を恐れるのは隠れた罪が暴かれるとか、信じたら社会生活に支障が出る等、心配するからです。目の覆いを取って光を受けることは、私たちの務めです。この光はハイビームの眩惑する光でも、電池切れ寸前の覚束ない光でもなく、契約の民であるのに律法を破り、預言者を虐待した民さえ寄り添おうとして、心の荒れた人々の間に、死の手から逃れホームレス状態で産まれた赤子です。

③ 光を妨げるもの

信じることを妨げる原因が、「神からの栄誉よりも、人からの栄誉を愛する」ことです。悪魔は絶えず世の声＆人の声と一体化して、私たちを惑わします。主イエスも荒野で試みを受けましたから(ﾏﾀ 4:)、信仰の戦いは神の訓練です。無頓着になるのも難しい。だとしたら神からどれほど栄光を受けているかを、知ることで屈折せずまっすぐに受け続けることが、結果的に勝利の秘訣です。自己卑下や他人との比較は罪で、神の評価に敏感であることが信仰成長です。光とつながっていますか。未だの方は接続し既にの方は屈折を改めませんか。

12 月 26 日

「拒まないで」

ヨハネ 12:44-50

武安　宏樹　牧師

① 大きな声で

本日の箇所は、ここまで主イエスが語ってきた教えが要約されています。ユダヤ人不特定多数の群衆を前に語る最後のことばなので、声を大にします。「叫んで」とも訳され、主を前にした悪霊＆長血の女＆湖で主を見た弟子たち、主イエスはラザロへ(11:43)＆十字架での最期(ﾏﾀ 27:50)など、生死に関わる喫緊の事態に頻出し「わたし」を 10 数回繰り返しながら、「非常な熱意を示し、彼らをより激しく刺激するための激励の言葉」(ｶﾙｳﾞｧﾝ)を頑固な人々を前に、同胞への愛を叫びます。日本人は大声を張り上げるのを恥ずかしがりますが、聖霊の促しから旧約時代は預言者たちが悔い改めを訴え(ｲｻﾞ 58:1/ｴﾚ 25:30)、新約時代は伝道者がステパノは殉教直前(使 7:60)、パウロは法廷で(使 23:6)、叫びました。聴く者は驚かされますが、語る真剣さは否が応でも伝わります。自分がどれほど罪深い者であり、キリストが橋渡しをしてくださったことで、救いの恵みを熱く声を大に時に涙流し、いのちの福音を証ししたいものです。

② 拒まないで

以上から主が何故大声で叫ぶのか動機は愛ですが、次にその内容について、語弊があるかも知れませんが、譬えて言えばガチガチに財布のひもを締めた、ユダヤ人たちに対して、今買わなかったら一生損しますよとハードル下げて、大安売り(＝出血大サービス)、されど本社から父が来た時点で即閉店ですと、私のことばを信じて買えば、取扱いがうまく出来ずとも天国へ行けますよと、アフターケアも聖霊がずっと付き添って助けますので、充実していますよと、主イエスは福音のセールスマンです。もちろん究極的には御言葉を守らずに、平気で破ってよいというのではないですが、頑張って律法を守りさえすれば、天でも地でも免罪符になると、自分に依り頼む思考を逆転したかったのです。実際にユダヤ社会では能力や家柄で律法教育の到達度に、差がついてしまう。「だれも」(46 節)信じれば祝福を享受でき、さもなくば滅びから逃げられない、公平性を期したのです。逆に金持ちの青年(ﾏﾀ 19:)やニコデモ(ﾖﾊ 3:)には、彼らの積み上げた努力を御破算にしたら売りますと、手の届かぬレベルまで、額をつり上げますが、最高の教育を受けたパウロは信仰による義の卓越性を獄で叫びます(ﾋﾟﾘ 3:)。信者は大声で語り、未だの方は早く購入しましょう！